

いき　　め　　こ　　ふん　　ぐん  
生 目 古 墳 群 N

—生目14号墳発掘調査報告書—

2014

宮崎市教育委員会



## 序

国指定史跡生目古墳群を紹介する際に、古墳群をわかりやすく説明するための二つのキーワードがあります。それは、

①今から約1750年前から1600年前、古墳時代前期という時期に、100m級の前方後円墳を3基造った九州で唯一の古墳群である。

②前方後円墳という各地に広がったお墓の形と、南九州独自の埋葬方法である地下式横穴墓が融合した全国で唯一の古墳がある。

というものです。

本書で報告する14号墳は、そのどちらにも当たらない、いわば注目されることが少なかった古墳です。しかし、発掘調査によって、墳丘の表面全体を石で覆い、特異な形状の埴輪を並べていたことが確認され、キーワードに挙げた古墳に勝るとも劣らない、重要な古墳であることが明らかになりました。整備計画の中で、当初は、往時の姿に復元する予定でしたが、保存状態がよかつたため、復元を行わず、遺構をそのままの状態で埋戻し、保存することになりました。そのため、現地では復元された姿をみることができなくなりましたが、本書をとおして、その姿に思いを馳せていただければと思います。

最後になりましたが、発掘調査、整備工事にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました先生方、発掘調査、整理作業に従事された作業員の皆様方など、すべての皆様に、心から厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

宮崎市教育員会

教育長 二見 俊一

## 例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成13～15、17・18年度に実施した生目14号墳の発掘調査報告書である。
2. 平成13～15、17年度発掘調査分に関しては、概要報告書を刊行しているが、本書の内容と齟齬がある場合、本書の記載を正式なものとする。
3. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会（調査時）  
委員長 西谷 正（九州歴史資料館館長）  
委 員 石野博信（兵庫県立考古博物館館長）  
　　奥野正男（宮崎公立大学教授：当時、平成19年度まで）  
　　北川義男（南九州大学教授：当時）  
　　白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）  
　　高瀬要一（独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長：当時）  
　　北郷泰道（宮崎県埋蔵文化財センター：当時、平成19年度から）  
　　柳沢一男（宮崎大学教授：当時）  
整備指導 文化庁記念物課  
　　　　　　宮崎県教育庁文化課（現文化財課）

### 4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

#### 発掘調査

（平成13年度）

調査総括	文化振興課長	小掠 聖	
	文化財係長	永井 淳生	
調査事務	主任	主事	竹野 隆司
調査担当	主任	技師	稻岡 洋道
	技	師	宇田川美和
嘱	託	河野賢太郎	
		川原 愛	
		門田奈津子	

（平成14年度）

調査総括	文化振興課長	小掠 聖	
	文化財係長	田村 泰彦	
調査事務	主任	主事	富永 智美
調査担当	主任	技師	稻岡 洋道
	主	事	松木 勇道
嘱	託	門田奈津子	

〈平成15年度〉

調査総括 文化振興課長 小掠 聖  
文化財係長 米良 明信  
調査事務 主 事 松木 勇道  
調査担当 主 任 技 師 稲岡 洋道  
嘱 託 井上 誠二  
整理担当 嘱 託 稲元久美子

〈平成17年度〉

調査総括 文化振興課長 野田 清孝  
文化財係長 米良 明信  
調査事務 主 任 主 事 松木 勇道  
調査担当 主 任 技 師 稲岡 洋道  
嘱 託 井上 誠二  
整理担当 嘱 託 稲元久美子  
タ 永友加奈子  
タ 德丸 理奈

報告書作成

〈平成18年度〉

調査総括 文化振興課長 野田 清孝  
主幹兼文化財係長 山田 典嗣  
調査事務 主 任 主 事 鳥枝 誠  
調査担当 主 任 技 師 稲岡 洋道  
嘱 託 井上 誠二  
島井 伸幸  
整理担当 嘱 託 稲元久美子  
タ 永友加奈子  
タ 德丸 理奈

〈平成25年度〉

調査総括 文化財課長 橋口 一也  
副主幹兼文化財係長 島田 正浩  
整備担当 副 主 幹 森田 浩史  
調査事務 主 事 芝 優美  
整理担当 契約課主査 稲岡 洋道  
主 任 技 師 竹中 克繁  
タ 石村 友規  
嘱 託 前田美恵子

5. 掲載した図面の実測及び現場写真の撮影は、稲岡、宇田川、竹中、河野、門田、井上、島井が分担して行った。
6. 掲載した図面の製図、図版作成は竹中、石村が、遺物の写真撮影は竹中が行った。
7. 本書の執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章第4節を竹中が、その他は稲岡の助言を受けながら石村が行い、編集は石村が行った。
8. 本書で使用する1号墳、3号墳、5号墳、7号墳、14号墳、22号墳、23号墳およびその周辺の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳およびその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。
9. 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

第1節 地理的環境と歴史的環境 .....	1
第2節 史跡整備にともなう発掘調査の概要 .....	1

### 第Ⅱ章 生目14号墳の発掘調査成果

第1節 生目14号墳の概要 .....	7
第2節 発掘調査の概要 .....	9
第3節 各トレンチの調査成果 .....	9
第4節 出土遺物 .....	35

### 第Ⅲ章 総括

第1節 生目14号墳の墳丘形態について .....	43
第2節 生目14号墳の葺石・敷石について .....	45
第3節 生目14号墳の位置付けについて .....	46

## 挿図目次

第1図 生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図 .....	2
第2図 生目古墳群周辺主要遺跡分布図 .....	3
第3図 生目古墳群主要古墳位置図 .....	5
第4図 生目14号墳測量図 .....	8
第5図 生目14号墳年度別調査区配置図 .....	10
第6図 14 a トレンチ実測図 .....	11~12
第7図 14 b トレンチ実測図 .....	13
第8図 14 c トレンチ実測図 .....	14
第9図 14 d トレンチ実測図 .....	15~16
第10図 14 d トレンチ埴輪配置図 .....	18
第11図 14 d トレンチ埴輪①出土状況 .....	19
第12図 14 d トレンチ埴輪②出土状況 .....	19
第13図 14 d トレンチ埴輪③出土状況 .....	20
第14図 14 d トレンチ埴輪④出土状況 .....	21
第15図 14 d トレンチ埴輪⑤出土状況 .....	22
第16図 14 d トレンチ埴輪⑥出土状況 .....	22
第17図 14 d トレンチ埴輪⑦出土状況 .....	23

第18図	14 d トレンチ埴輪⑨出土状況	24
第19図	14 d トレンチ埴輪⑩出土状況	25
第20図	14 d トレンチ埴輪⑪出土状況	26
第21図	14 d トレンチ埴輪⑫出土状況	27
第22図	14 e トレンチ実測図	28
第23図	14 f トレンチ実測図	29~30
第24図	14 g トレンチ実測図	31~32
第25図	14 h トレンチ実測図	33
第26図	14 i トレンチ実測図	34
第27図	生目14号墳出土遺物①	37
第28図	生目14号墳出土遺物②	38
第29図	生目14号墳出土遺物③	39
第30図	生目14号墳出土遺物④	40
第31図	生目14号墳墳丘・周溝復元図	44
第32図	生目古墳群主要古墳変遷図	46

## 表 目 次

第1表	生目古墳群一覧	6
第2表	出土遺物観察表	42
第3表	14号墳墳丘復元法量	45

## 写真図版目次

写真図版 1	生目14号墳空中写真（遠景）	48
写真図版 2	14 a・14 b トレンチ調査状況	49
写真図版 3	14 c・14 d トレンチ調査状況	50
写真図版 4	14 d トレンチ調査状況①	51
写真図版 5	14 d トレンチ調査状況②	52
写真図版 6	14 e トレンチ調査状況	53
写真図版 7	14 g・14 h・14 i トレンチ調査状況	54
写真図版 8	生目14号墳出土遺物①	55
写真図版 9	生目14号墳出土遺物②	56
写真図版10	生目14号墳出土遺物③	57



## 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

### 第1節 地理的環境と歴史的環境

宮崎市の地形は、大きく東の平野部と西の丘陵部からなる。日向灘（太平洋）に面した海岸部に南北に伸びる平野部は、宮崎県域の10%以上の面積を占める宮崎平野の南半にあたり、内陸側の丘陵部は九州山地の東端にある。市域のはば中央には、内陸の丘陵部から平野部を横断して日向灘に注ぎ込む、九州第2位の全長と流域面積を誇る大淀川が東流する。

生目古墳群は宮崎平野の南西端、内陸丘陵部の手前に位置する標高25~28mの跡江丘陵上およびその周辺に所在する古墳の総称である。跡江丘陵は平野の基盤層である宮崎層群の上に、1mほどの砂岩円礫層を挟んで始良入戸火碎流堆積物（シラス：26,000~29,000年前、始良カルデラより噴出）が5~10m堆積して形成されており、水田面からの比高差は約20mである。丘陵の平面形は屈曲したL字形で、東西1.2km、南北1.3kmを測る。台地状の平坦に近い地形であり、50基を数える生目古墳群のほとんどはこの丘陵上に築かれている。丘陵眼下、現在の跡江集落となっている微高地を挟んで1kmほどの位置に大淀川が流れるが、東流してきた大淀川が南へと大きく流れを変える地点にあたっている。

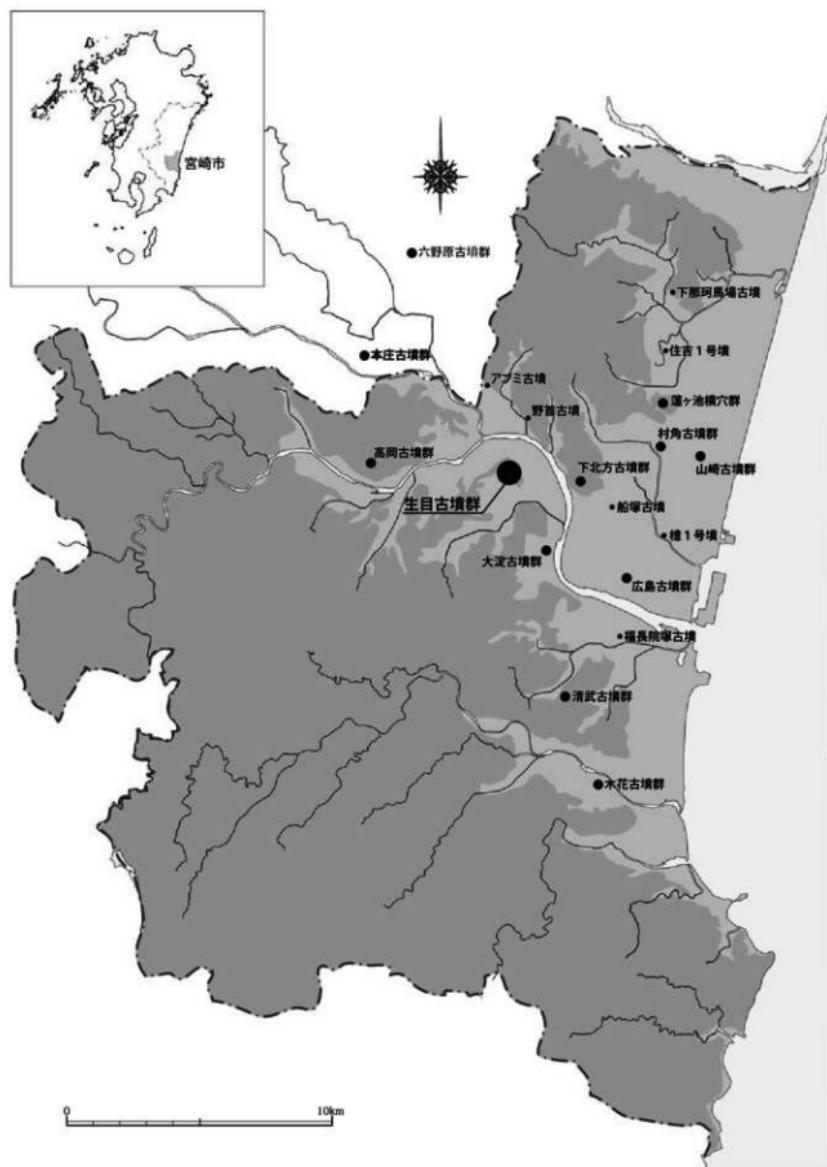
跡江丘陵周辺は市域でも遺跡の集中する地区のひとつである。大淀川を挟んで北側の丘陵上には金剛寺原第1・2遺跡や垂水第1・2遺跡など旧石器時代後期を中心とした遺跡が集中している。この丘陵の南端には縄文時代早期の柏田貝塚があるが、跡江丘陵の南端にも同時期の跡江貝塚が所在している。弥生時代には跡江丘陵上に環濠を持つ集落である石ノ迫第2遺跡が形成されているが、対岸の下北方丘陵上にも同じく環濠集落の下郷第2遺跡がある。古墳時代には跡江丘陵の南東約800mに位置する間越遺跡、北東約700mの大屋敷遺跡でそれぞれ古墳時代中期以降の集落が営まれているが、生目古墳群の最盛期である前期の集落は現在までのところ確認されていない。また対岸の下北方丘陵上では、中期から後期にかけて下北方古墳群が造営されている。古代～中世においては跡江丘陵眼下の低地中に位置する沖ノ田遺跡、雀田遺跡で水田址が検出されており、また丘陵南東端には山城である跡江城が構築されている。

### 第2節 史跡整備にともなう発掘調査の概要

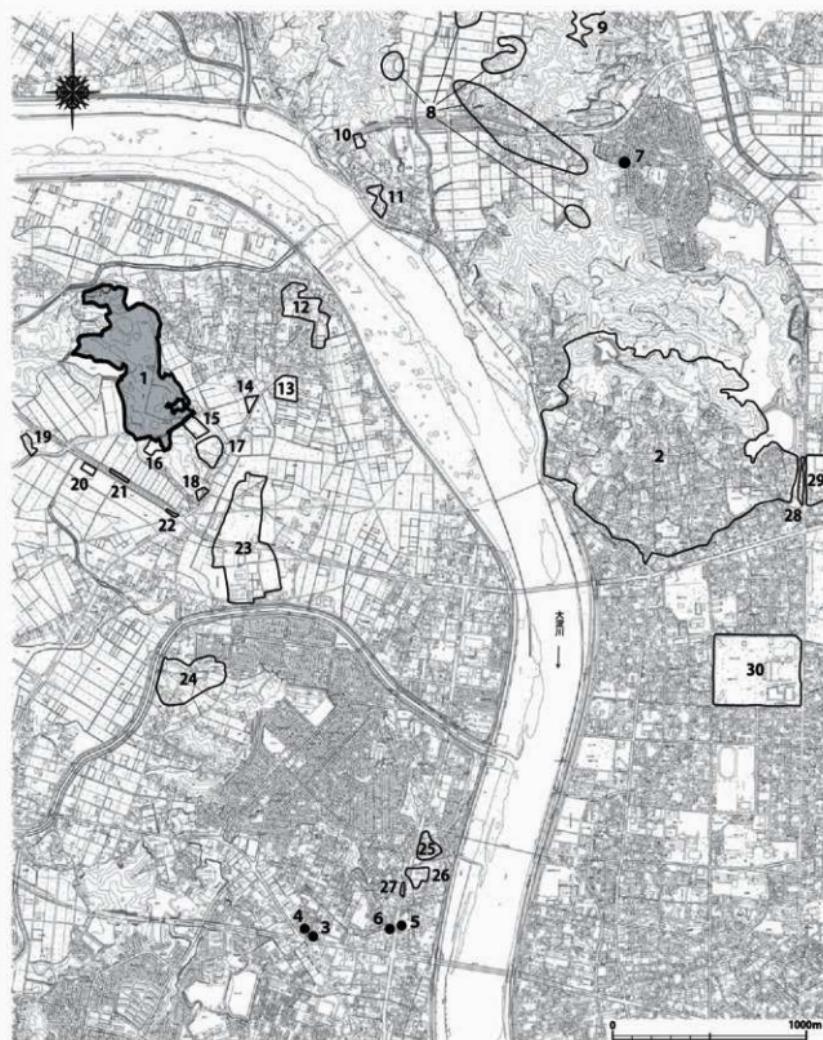
生目古墳群は前方後円墳8基、円墳42基からなる。100m超の大型前方後円墳が古墳時代前期を中心として累代的に営まれた、九州最大の前期首長墓系譜として評価されている。昭和18年9月8日に43基が国の史跡として指定を受けたが、その後の調査によって、墳丘が消滅した古墳の確認等により、現在では総数50基となっている。

平成5~7年度に丘陵上の古墳群全域を対象として墳丘周辺部分のトレンチ調査を実施し（宮崎市教委1996）、平成10年度より史跡整備にともなう発掘調査を開始した。現在までに24基の古墳で確認調査を実施している。以下、主要な古墳について調査成果の概略を述べる。

丘陵北端に位置する墳長120m以上の前方後円墳である1号墳は、平成25年度よりトレンチを主体とした調査を実施している。生目古墳群中最初の首長墓と目されているが、現在調査中であり、その位置付けはまだ確定的ではない。



第1図 生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図



第2図 生目古墳群周辺主要遺跡分布図 (S=1/25000)

古墳群中、最大規模を誇る前方後円墳の3号墳では、これまでに19ヶ所のトレンチ、調査区を設定しているが、時期比定可能な良好な遺物の出土に恵まれていない（宮崎市教委2012）。墳長137mの前方部2段・後円部3段築成で、斜面の葺石に加え、各段のテラスおよび墳頂にも敷石が施され、文字通り墳丘全面が石で覆われている。また墳丘裾の基底石列外にも敷石が施されており（基底部砾敷帶）、この部分を含んだ場合の全長は140mになる。

墳長57mの5号墳は、墳丘周囲の損壊が著しかったことから、築造当時の姿に復元整備を行うこととし、墳丘、周溝を含め全面に近い調査を実施した（宮崎市教委2010）。前方部、後円部ともに2段築成で、各段の斜面には砂岩の小円礫を用いた丁寧な葺石面の成形をおこなっている。また後円部、前方部墳頂には特異な形状の壺形埴輪が少量立てられている。

墳長46mの7号墳は造り出し周辺より出土した大量の土師器、須恵器によりTK23型式期に位置付けられる生目古墳群最後の前方後円墳である。5号墳と同じく全面的な復元整備の対象として墳丘、周溝とともに全体の半分に近い面積での調査を行っている。特筆すべきは後円部墳丘内に玄室を設ける妻入り型の大型地下式横穴墓が確認されたことであり、その構築状況、規模から7号墳の中心埋葬施設となる可能性がある。

円墳として指定されていた21号墳は、調査の結果、全長33mの葺石を持たない本古墳群最小の前方後円墳であることが判明した。全面に近い調査によって周溝内に地下式横穴墓が13基検出され、そのうちの1基は宮崎平野最古となる5世紀前葉の構築であることが確認された。

現況長101mの前方後円墳である22号墳は、トレンチ調査により後円部3段築成（前方部墳丘は未調査であるが、現況から2段築成の可能性が高い）で、焼成前穿孔の壺形埴輪を持つことが確認された。前方部周溝内の張り出し部からは集成編年4期に位置付けられる土師器群が出土している。また3号墳と同じく各段テラス、墳頂平坦面に敷石が施されている可能性が高い。

前方後円墳以外でも、現況径10mほどの小円墳群16・17・18・19号墳でトレンチ調査を実施している（宮崎市教委2013）。うち3基で時期比定の材料となる良好な資料に恵まれ、各々、生目古墳群における前方後円墳築造の空白期や、築造停止後のものであることが判明した。

平成20年4月に5号墳の全面復元と公園設備の完成をもって国指定生目古墳群史跡公園として開園、翌21年には史跡公園に隣接して生目古墳群のガイダンス施設を兼ねた埋蔵文化財センター生目の杜遊古館を開館したが、整備事業は発掘調査、整備工事とともに今日も継続して順次実施中である。

#### 【引用・参考文献】

- 早田 努 1997「序章 第1節 県内の地形と地質」「宮崎県史 通史編 原始・古代1」宮崎県。  
宮崎市教育委員会 1996「史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書」宮崎市文化財調査報告書第28集。  
宮崎市教育委員会 2010「生目古墳群I」-生目5号墳発掘調査報告書-、宮崎市文化財調査報告書第80集。  
宮崎市教育委員会 2012「生目古墳群II」-生目3号墳発掘調査報告書-、宮崎市文化財調査報告書第91集。  
宮崎市教育委員会 2013「生目古墳群III」-生目16・17・18・19号墳発掘調査報告書-、宮崎市文化財調査報告書第96集。



第3図 生目古墳群主要古墳位置図 (S=1/4000)

第1表 生目古墳群一覧

現No	旧No	墳形	規模 (m) 長×円径×高	規格	蓋石	出土遺物	備考
1	6	前円	120以上×73×12.7	後円部3段	有		平成25年度調査
2	5	円	27		無		
3	17	前円	137×77×11	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世の豪耕縮が巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×29×4.4	後円部、前方部2段	有	円筒埴輪？、壺形土器、高环	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造出し有	有	土師器（壺、壺、瓶、高环）、須恵器（环、高环、ハソウ、把手付鉢、大型脚台付壺、筒形器台）石製垂玉、石製小玉、石製筋跡車	後円部中心に向かって、18号地下式横穴墓を構築。その他周溝内から8基、周溝外から4基の地下式横穴墓を確認。
8	22	円		無段塗	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25		34		無		
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×39×4.4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より22号地下式横穴墓を確認
15	円		11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16		無	須恵器	
17	32	円	17		無	土師器（壺、高环）	周溝内より地下式横穴墓を確認
18	29	円	17		無		
19	28	円	15		無		周溝外側で地下式横穴墓を確認
21	35	前円			無	壺形埴輪	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段か？	有	壺形埴輪、土師器（壺、高环、壺）	周溝内より、張り出し部、23号地下式横穴墓を確認・後円部上段に中世の豪耕縮
23		前円	57×30×4.9		無		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認（5号墳と7号墳の間）
32	未G	円			無		平成16年度確認（7号墳南側）
33	41	円			無		平成14年度確認（9号墳・新30号墳間）・概報写で旧15号墳と誤認・誤記
34	42	円					
35	36	円					古墳ではない・平成25年度調査
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式横穴墓を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12・13号地下式横穴墓を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式横穴墓を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

## 第Ⅱ章 生目14号墳の発掘調査成果

### 第1節 生目14号墳の概要

#### (1) 立地と過去の調査

生目14号墳は、生目古墳群の中央付近に立地し、古墳群を現在の芝生広場付近の古墳空白地帯を境界にして、丘陵北半、丘陵南半という2つの支群に分けると、丘陵南半支群の最も北側に位置する。14号墳が所在する場所は、現況では丘陵が舌状に谷へ向かって突出する形状になっており、東側、西側、北側の三方を谷に囲まれている。ただし、東側、北側は丘陵を抉りこむような谷地形となっており、谷を挟んで再び丘陵が存在することから、遠方に向けて眺望が開けているのは西側のみである。

史跡公園整備以前は、墳丘上には、植林された杉を除くと、マテバシイやアラカシ、コジイなどを見られ、里山の景観を呈していた。その一方で、前方部周辺は、作業所が建築され、ココスマシなど熱帶性樹木の苗場となっていた時期もあり、地形の変更が著しい。さらに後円部西側には、現在は撤去されているが、送電線の鉄塔が建てられていた時期があり、周溝の一部が削平されている。このように14号墳の周辺は多数の地形変更が見られた。しかし、墳丘自体は後円部西側裾が1m程度の崖面になっているなど、後円部、前方部に数箇所の擾乱跡が確認できるが、全体的な形状は良好に保たれていた。

過去の調査は、平成6年度に史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査として実施されている。調査箇所は、東側くびれ部墳丘裾に、墳丘主軸に直交する形で14-1トレンチを、さらに14-1トレンチの墳丘外側延長線上に14-2トレンチを設定している。14-1トレンチでは、墳丘上から転落した葺石を検出している。

#### (2) 基本層序

生目古墳群が所在する跡江丘陵では以下が基本的な層序となり、今回の調査箇所でも同様である。ただし14号墳周辺では部分的にVI層の風成層が堆積している場所があり、本来のVI層よりも締りがなく色調が淡い。なお、基本層序の詳細に関しては『生目古墳群I』の第Ⅰ章第2節を参照されたい（宮崎市教委2010）。

I層：表土。

II層：黒褐色土（0～50cm）桜島第3テフラ（文明ボラ1471年）、新燃享保輕石（1717年）。

III層：黒ボク土（0～30cm）T h-S（霧島高原スコリア11世紀～13世紀）。

IV層：黒ボク土（0～30cm）自然堆積層、V層と基本的には同様だが、古墳構築後の堆積。

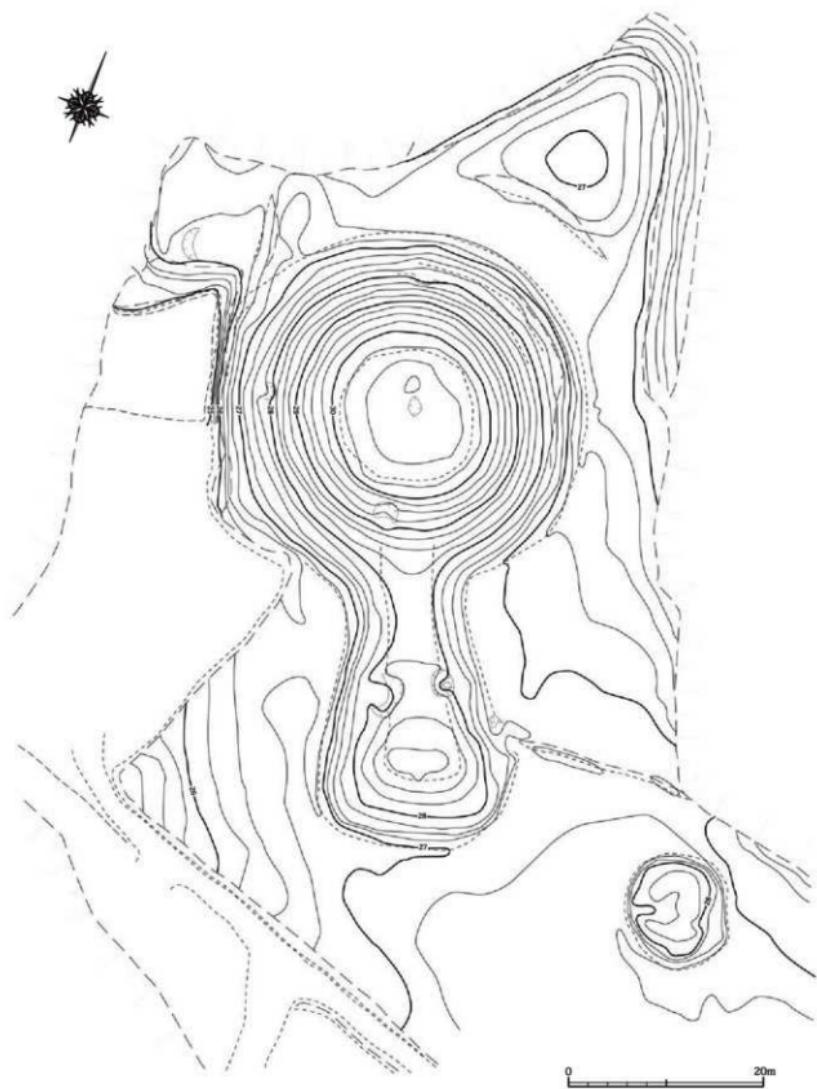
V層：黒ボク土（0～50cm）自然堆積層、IV層と基本的には同様だが、古墳構築前の堆積。

VI層：アカホヤ土（0～30cm）テフラ層、（K-A h 7300年前）。

VII層：暗褐色土（80cm前後）ローム層、下位で霧島小林降下輕石（14,000～16,000年前）。

VIII層：シラス（500cm以上）テフラ層（26,000～29,000年前）。

古墳を調査対象とした場合、V層以下が地山となる。14号墳もV層以下を削り出し、その上に盛土を施し、墳丘を構築している。周溝の床面はVI、VII層を中心とするが、14cトレンチではVIII層に達している。



第4図 生目14号墳測量図 (S=1/500)

## 第2節 発掘調査の概要

発掘調査は平成13年度から平成15年度、平成17年度、平成18年度の5ヶ年に渡って行われた。調査区の名称は、後円部背面の墳丘主軸位置のトレンチを14aトレンチとし、残りは調査年度に関係なく、時計回りに14bトレンチ、14cトレンチと調査区名を振っている。年度ごとの調査区名と調査区位置に関しては第5図に記載している。

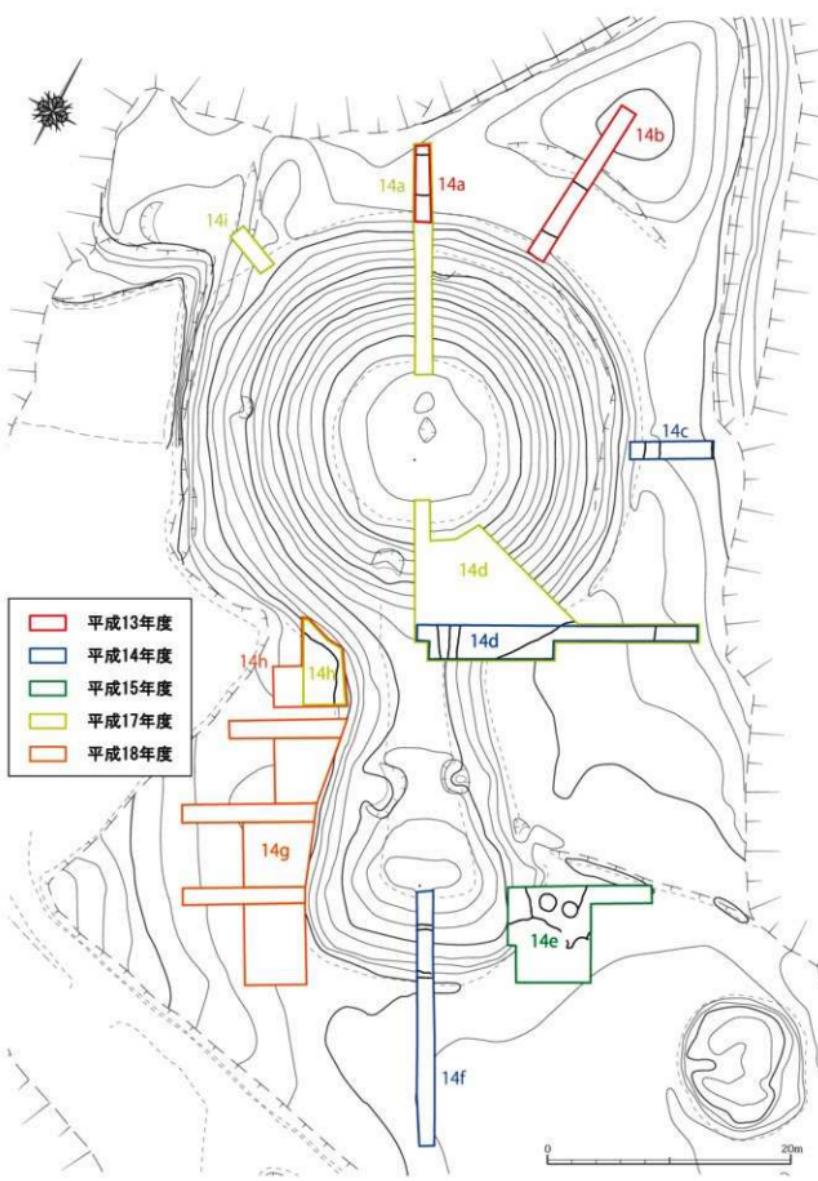
発掘調査の結果、墳丘は後円部西側、前方部隅角を除き良好な状況で残されており、墳長63m、後円部、前方部ともに2段築成であることが確認された。外表施設としては、墳丘の斜面部で葺石、テラスや墳頂平坦面で敷石が検出され、墳丘全面を石で覆っていたことが明らかになった。また壺形埴輪が後円部、前方部の墳頂平坦面に樹立されていたことが確認された。墳丘が良好に残されていた一方で、周溝は搅乱を受けている部分が多く、不明瞭な部分が多い。特に墳丘西側は削平が著しく、周溝外側の肩はすべて失われており、わずかに14dトレンチの一部で立ち上がりが確認された。墳丘東側に関しては、前方部側で多数の搅乱が検出されたものの、周溝の形状を復元するデータが得られている。周溝は、橋本達也（橋本2013）が「九州南部型前方後円墳」の指標の一つとした、前方部隅角に向かって取束する形状である。前方部隅角と前方部前面は搅乱により周溝が確認できないが、前述の隅角に向かい取束する平面形や、前方部前面では深くまで搅乱を受けていないにもかかわらず、周溝が検出されていない状況から、前方部前面には周溝が巡らされていなかったと考えられる。

## 第3節 各トレンチの調査成果

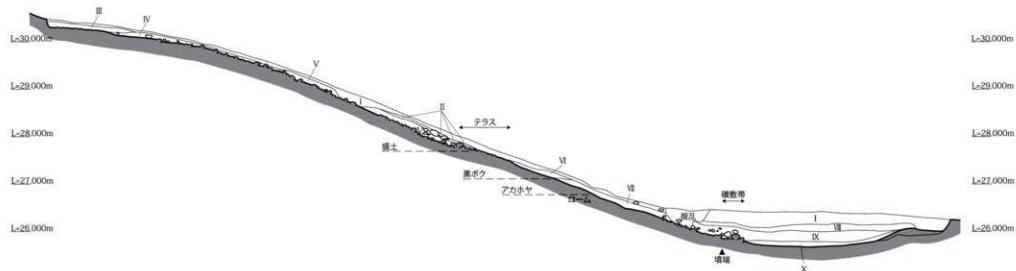
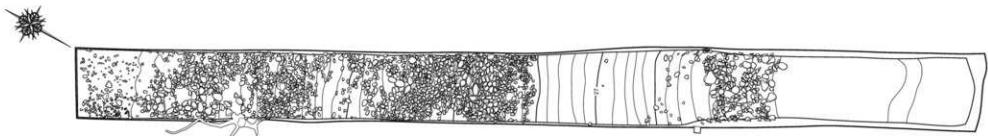
本節では、14aトレンチから14iトレンチまでの調査成果を順に記述していくことにする。

### （1）14aトレンチ

14aトレンチは、墳丘主軸ラインの後円部背面墳頂肩口から周溝外縁部推定位置にかけて設定した19.2m×1.5mのトレンチである。調査の結果、後円部の段築の状況や墳丘端部位置、周溝形状が明らかになった。段築は2段築成で、高さは1段目1.9m、2段目2.5mを測る。1段目の中位付近、標高27.7m付近まで地山形成、それより上部が盛土構築となる。1段目斜面は、上部の葺石が転落し、欠落している状況であったが、墳丘端部付近は長径10cm程度の円礫や角礫による葺石が残存していた。基底石は長径20cm程度の円礫を並べたもので、その他葺石よりも若干サイズが大きいが、特別に大型の石を配置するという意識は感じられない。14aトレンチでは基底石より外側に幅0.6m程度の平坦面が存在し、そこに長径15cm程度の円礫や角礫を敷設していた。このように基底部外側に敷石を配す事例は、生目古墳群の中で1号墳（平成25年度調査、未報告）、3号墳、22号墳で確認されている。1段目テラスから墳頂平坦面にかけては、良好な状態で葺石、敷石が確認された。場所によって異なる大きさの礫を使用しており、1段目テラスは長径5cm程度の礫、2段目斜面は長径10~15cm程度の礫、墳頂平坦面は径2~5cm程度の小礫を使用していた。墳頂平坦面の小礫は、平坦面の外縁寄りにやや大きめの礫、中心寄りに細かな礫を使用しており、平坦面内においても、場所によりサイズの異なる礫を使用していたことが確認された。また墳頂平坦面からは、壺形埴輪片が出土しており、壺形埴輪を墳頂部に樹立していたことが明らかになった。周溝は、墳端外側の敷石部分を除くと、幅約3.3m、深さは深い所で0.3m程度である。断面形状は浅い皿状で、墳丘側、外縁側とともに立ち上がりの角度は10~20°と緩やかである。



第5図 14号墳年度別調査区配置図 (S=1/400)



#### 土層記述

- I: 表土(客土)。Th-S、軽石粒、小礫を多く含む。縫りなし。
- II: 客土。褐色ロームブロック層、縫りあり。Th-S、軽石含む。
- III: 暗褐色土。縫りなし。1~10mm程度の褐色粒子、ブロックを少量含む。
- IV: 褐色ローム層。縫りなし。地山ローム層に似る。質感が埴丘面に類似するため、埴丘盛土削落層と考えられる。
- V: 暗褐色土。縫りややあり。Th-Sを多量に含む。埴輪片含む。基本層序IV層。
- VI: 黒褐色土。縫りややあり。地山黒ボク層(基本層序V層)に類似するが、色味がやや明るい。地山削落土層。
- VII: 褐色土。縫りなし。地山アカホヤ山(灰岩)ローム層(基本層序VI、VII層)に色、質感が類似するが縫りがない。地山削落土層。
- VIII: 黑褐色土。縫りあり。Th-Sを多量に含む。基本層序III層。
- IX: 黒色土。縫りあり。やや粘性がある。いわゆる黒ボク層。基本層序IV層。
- X: 暗褐色土。縫りややあり。褐色土内に黑色土が斑状に入る。黒ボク層と地山ローム層の漸移層。



第6図 14aトレンチ実測図 (S=1/80)

土質注記

I : 表土

IIa: 客土・褐色土・繊りなし。

IIb: 客土・褐色土・繊りなし。Th-S含む。

IIc: 客土にぶい黄褐色土・やや砂利あり。1 mm程度の明褐色粒子含む。

IId: 客土・黄褐色土・繊りなし。褐色ローム・プロック含む。

III: 脱色土・繊りなし。Th-S含む。

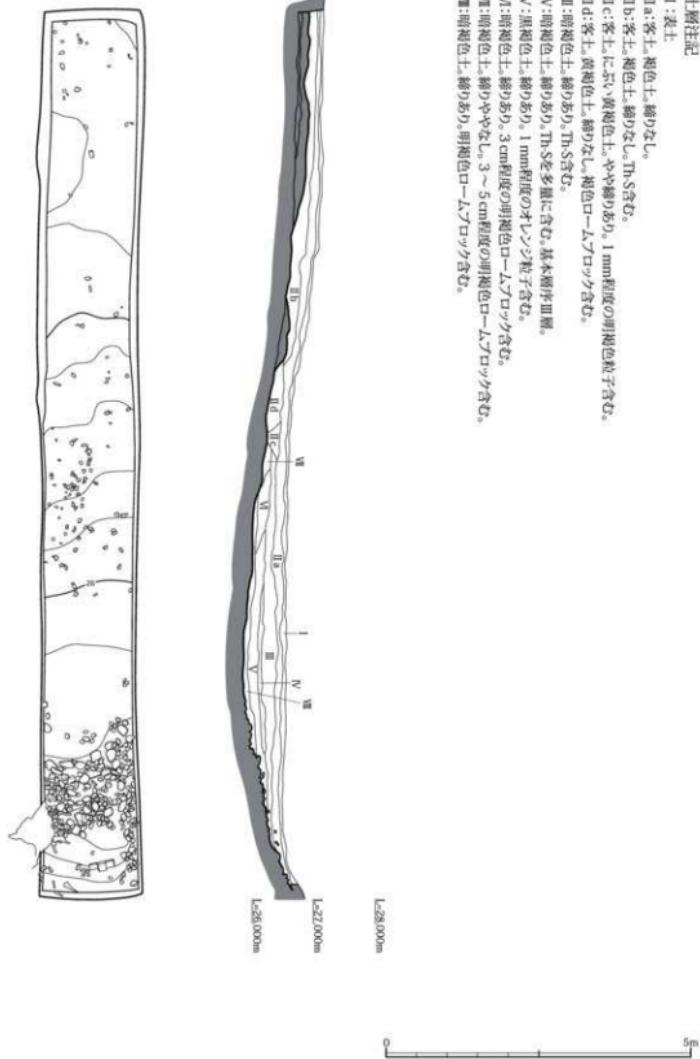
IV: 黄褐色土・繊りあり。Th-Sを多量含む。基本層序Ⅲ層。

V: 黒褐色土・繊りあり。1 mm程度のオレンジ粒子含む。

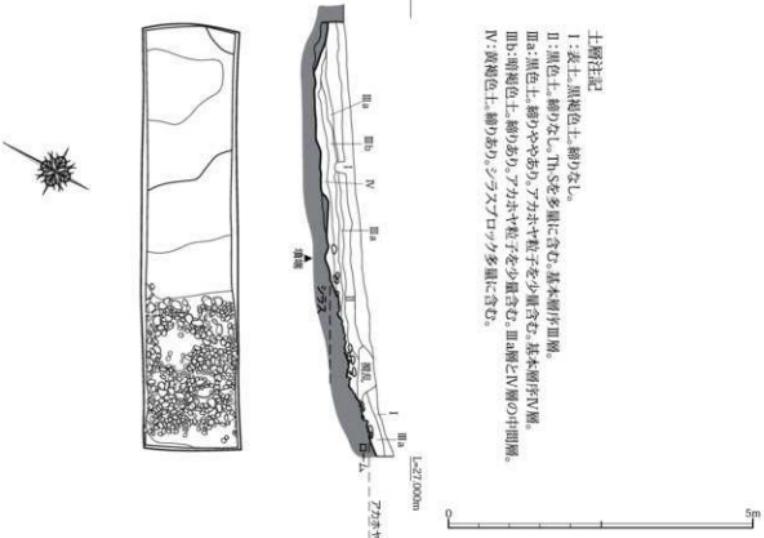
VI: 黄褐色土・繊りあり。3 cm程度の明褐色ローム・プロック含む。

VII: 黄褐色土・繊りやなし。3 ~ 5 cm程度の明褐色ローム・プロック含む。

VIII: 黄褐色土・繊りあり。明褐色ローム・プロック含む。



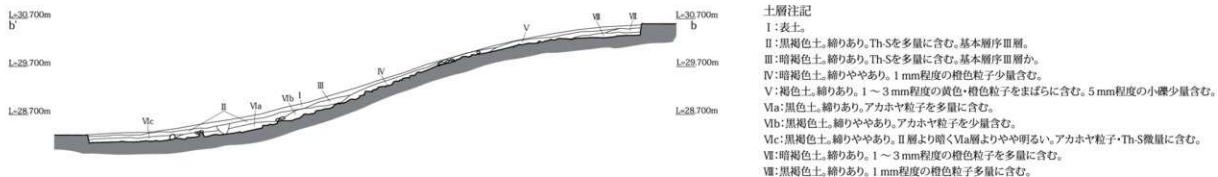
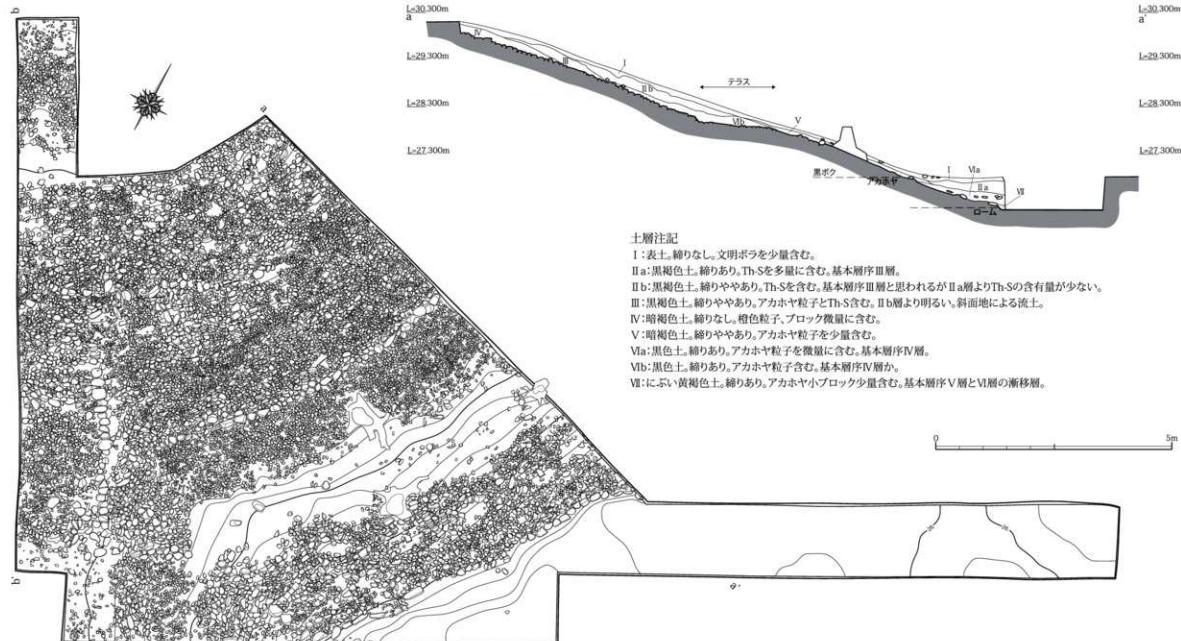
第7図 14bトレチ実測図 (S=1/80)



第8図 14cトレンチ実測図 (S=1/80)

## (2) 14 b トレンチ

14 b トレンチは、後円部北東側墳端部から周溝外縁、さらに外側に見られる地形の高まりまで含めて設定した14.4m×1.5mのトレンチである。調査の結果、墳丘端位置、周溝形状、旧地形が明らかになった。墳丘端部の状況は14 a トレンチと同様で、長径20cm程度の円礫を基底石とし、その上部に長径10cm程度の円礫や角礫による葺石が施されていた。ただし14 b トレンチでは、基底石外側のテラス面は14 a トレンチほど明瞭ではなく、僅かな傾斜変換が見られるものの、墳丘から穏やかな傾斜のまま周溝底に至る。基底石外側に10~15cm程度の礫が散見されるが、本来は14 a トレンチと同様に、敷石が敷設されていたと考えられる。周溝は幅約4m、深さは0.2mを測る。断面は浅い皿状で、墳丘側、外縁側ともに立ち上がりの角度は10~15°と緩やかである。周溝外縁側の立ち上がりからその外側に向かって、長径が10cmに満たない礫が散在しているが、攪乱を受けた際のものと見られ、攪乱を受けていない周溝底面付近では礫が見られない。周溝外縁の地形の高まりは、客土下で地山であるアカホヤ風成層を確認しており、人為的な盛土は確認されなかった。地山の直上層が客土であることから、直ちには判断できないが、14 a トレンチでは周溝外縁から僅か2m程度で崖面となっていることなど、周辺の地形を加味すると、古墳や中世の遺構ではなく、旧地形の残存と想定される。14号墳の築造当初は、現在よりも14号墳が所在する舌状の丘陵突出部の幅、長さが大きく、その他の位置でも後円部北東側のように地形の高まりが存在していた可能性が高い。14 a トレンチの墳丘で確認されている地山アカホヤ層のレベルと、この地形の高まりのアカホヤ層のレベルがほぼ同じであることからも追認できる。また崖面の浸食は現在も続いており、平成25年度に14 a トレンチ北側の崩落防止工事を行った。



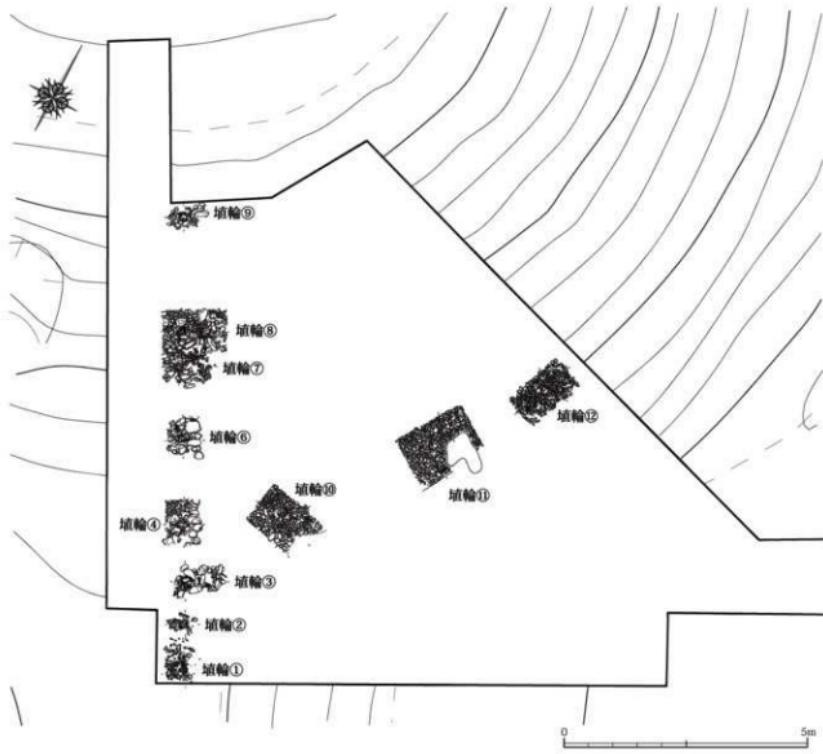
第9図 14dトレンチ実測図 (S=1/80)

### (3) 14 c トレンチ

14 c トレンチは後円部東側に墳丘主軸に直交する形で、墳端部から周溝外縁に向かって設定した、7m × 1.5mのトレンチである。調査の結果、墳丘端位置、周溝形状が明らかになった。墳丘端部の状況は14 a トレンチ、14 b トレンチとはほぼ同様で、長径20cm程度の円礫を基底石とし、その上部に長径10cm程度の円礫や角礫による葺石が施されていた。残存状況が良好な部分で見ると、基底石は小口面を外側に向かって、規則的に並べている。基底石外側のテラス面は傾斜変換点が14 b トレンチよりも明確で、幅も約1.3mあり、礫を敷設している。テラス面の周溝側端部にも20cm前後と通常の葺石、敷石よりやや大きめの礫を配している。周溝は幅約4m、深さは深い所で0.3mを測る。断面形状は浅い皿型であり、墳丘側の立ち上がりは15°前後と緩やかであるが、周溝外縁側の立ち上がりは25°前後とやや急な角度となっている。周溝外縁部立ち上がり付近での深さは0.25mであるが、土層堆積状況を見ると、周溝外縁肩部は、地山暗褐色ローム層（基本層序Ⅲ層）直上にT h-Sを含む黒ボク土層（基本層序Ⅲ層）が堆積しており、本来存在するはずのアカホヤ（基本層序Ⅵ層）、黒ボク土（基本層序V層、IV層）が欠落している状況であった。14号墳の墳丘では基本層序どおりに堆積していることから、周溝外縁肩部付近ではT h-Sが降灰する直前に削平を受けたと考えられる。生目古墳群内では、生目9号墳においても、T h-S降灰直前に墳丘が削平されており、この時期に土地改変が盛んに行われたと考えられる。

### (4) 14 d トレンチ

14 d トレンチは、東側くびれ部に、墳丘形態や墳端、後円部と前方部の接続状況や周溝確認のために設定した。当初は23.5m × 1.5mのトレンチとして設定したが、後円部と前方部の接続状況を明確にするため一部を拡張した。さらに平成17年度の調査では、墳丘主軸に合わせて前方部から後円部頂付近までと、後円部中心から主軸ラインより45°南東方向に拡張し、後円部の1/8を調査区として再設定した。調査の結果、後円部、前方部ともに2段築成であることが明らかになった。14 d トレンチでは後円部は1段目が1.6m、2段目が2.1mと2段目が1段目よりも0.5mほど高いが、前方部は1段目が1.0m、2段目が0.3mと、2段目が著しく低い。葺石、敷石は非常に良好な状態で検出された。墳頂平坦面には径3cm程度の小礫、1段目テラス面には長径10cm程度の礫が使用されており、14 a トレンチと同様に、場所により礫の大きさを使い分けていることが確認された。斜面の葺石は、墳端、テラス端部という横方向の区画には長径30~60cm程度の明確に区画を隔てる石列を用いるが、縦方向の区画は区画列石ではなく、区画内の石の大きさを揃え、その差によって区画を形作っている。また後円部と前方部では、葺石に使用される礫の大きさが異なり、後円部では長径20cm前後、前方部では長径15cm前後の礫を主として用いている。後円部と前方部の接続方法は、テラス同士はそのまま接続するが、前方部墳頂平坦面は、後円部に向かって緩やかに登り、明確な傾斜変換点もなく、そのまま後円部2段目斜面となる。後円部斜面と前方部からのスロープの境界は、傾斜の変換ではなく、前方部墳頂平坦面の肩口に配する長径40~60cm程度の大き目の石が途切れる位置に求めることができる。周溝は前述のとおり前方部前面に向かって直線的に取束する形状のため、くびれ部で最も周溝幅が広くなる。くびれ部の周溝幅は約12mと想定され、深さは0.2mを測る。断面形状は浅い皿型で、周溝外縁は緩やかに立ち上がる。14 d トレンチでは、14 a ~ c トレンチで確認された、後円部基底石外側のテラスとそこに敷設された礫が確認されていない。そのためテラスの取束位置を検討する必要がある。調査区外である可能性もあるため断定はできな

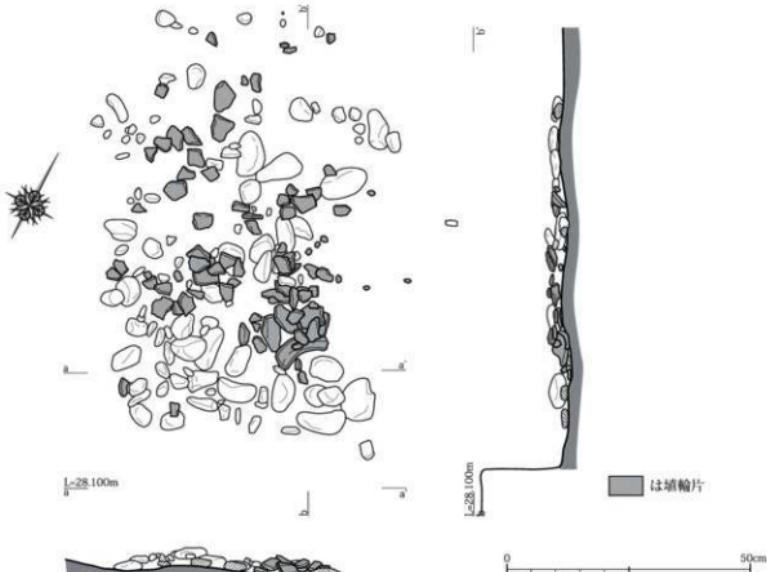


第10図 14dトレンチ埴輪配置図 (S=1/100)

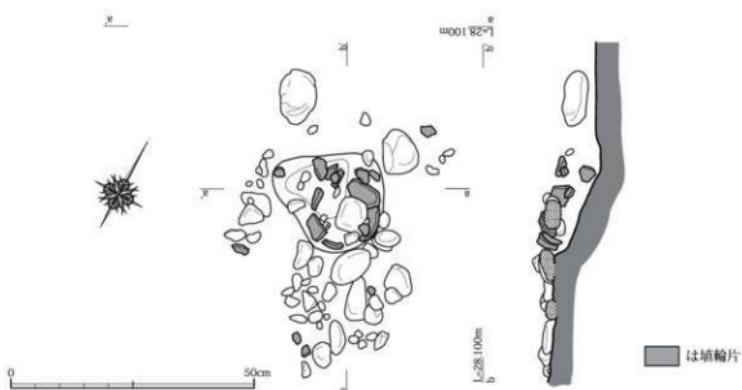
いが、14dトレンチの北壁付近の基底石の不自然な膨らみをその候補として挙げたい。後円部の基底石は、14dトレンチの北壁付近で、くびれ部からの円弧の角度を変え、外側に向かって約0.5m膨らんでトレンチ壁外に進んでいく。また土層断面図を見ると、くびれ部からの円弧をそのまま描き、トレンチ壁まで進んだ位置でわずかではあるが埴輪の可能性がある傾斜変換点が確認できる。これらのことから、非常に中途半端な位置ではあるが、この位置で基底石外側のテラスが収束する可能性を指摘しておきたい。

遺物は前方部埴頂、前方部と後円部をつなぐスロープ、スロープの延長線上の後円部2段目斜面において壺形埴輪列が確認されている。0.8~1mの間隔で、9個体の埴輪の樹立を確認した。また後円部1段目テラスにおいても、埴輪片が纏まって出土する状況が3ヶ所で確認されたが、個々の破片が小さく広範囲に広がっていることや底部片が確認されたのが一個体のみであることから、埴頂平坦面からの転落の可能性もある。ここからは、壺形埴輪の個別の出土状況について記述していくことにするが、埴輪⑤は欠番である。

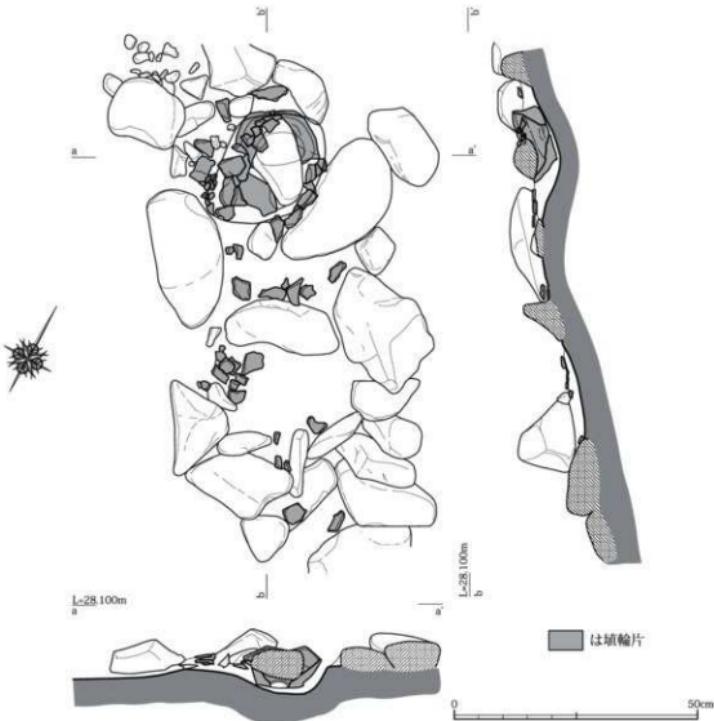
埴輪①（掲載番号6・11） トレンチの南端、前方部埴頂平坦面で出土した埴輪である。出土状況



第11図 14dトレーニチ埴輪①出土状況 (S=1/10)



第12図 14dトレーニチ埴輪②出土状況 (S=1/10)



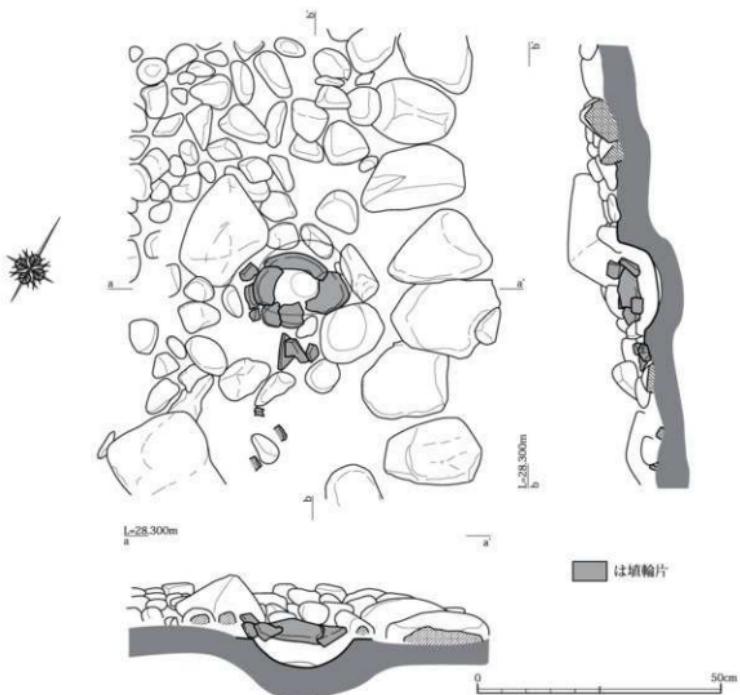
第13図 14dトレンチ埴輪③出土状況 (S=1/10)

は、敷石の隙間に散在するような状況で、底部片が出土しているものの、埴輪樹立用の掘方は認められない。

**埴輪②（掲載番号12）** 埴輪①の北西側、約0.8mの間隔を置いて出土した。埴輪樹立用の掘方内から底部片が原位置を保って出土している。底部片の上には長径7cm程度の礫が置かれており、礫を樹立の際の重りとして使用していたと考えられる。掘方は平面不整形で、長軸20cm、深さ5cmを測る。埴輪の復元底径が11cm程度であることから、底径の倍程度の掘方を掘削し、埴輪を樹立したことが分かる。

**埴輪③（掲載番号14）** 埴輪②の北西側、約0.8mの間隔を置いて出土した。埴輪②と同様に、埴輪樹立用の掘方内から底部片が出土している。底部片の上にはやはり樹立の際の重りと考えられる長径15cmほどの礫が入っていた。掘方は平面不整形で、長軸28cm、短軸21cm、深さ6cmを測る。埴輪の復元底径は11.5cm程度であるため、底径の2倍強の掘方を掘削し、埴輪を樹立したことが分かる。

**埴輪④（掲載番号15）** 埴輪③の北東側、約1.2mの間隔を置いて出土した。埴輪樹立用の掘方内



第14図 14dトレンチ埴輪④出土状況 (S=1/10)

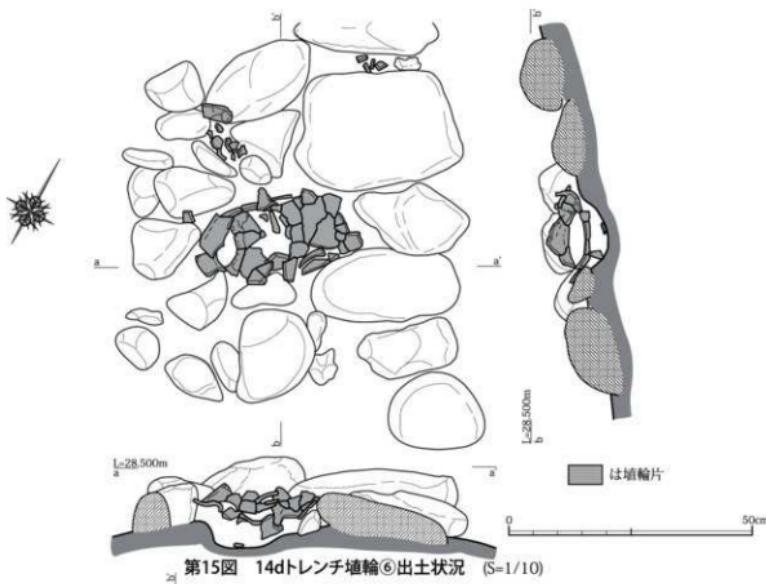
から底部片が出土した。掘方は平面橢円形を呈し、長軸19cm、短軸15cm、深さ7cmを測る。埴輪の復元底径は14cm前後と掘方の短軸と近い数字となる。そのためか底部片は掘方底に接しておらず、やや浮いた位置に底部が位置している。

**埴輪⑥（掲載番号8）** 埴輪④の北東側、約1.7mの間隔を置いて出土した。埴輪は樹立用の掘方上で横倒しになった状態で検出され、底部から胴部まで良好な状況で出土した。埴輪の内部には樹立の際の重り用の礫が入れられていた。掘方は平面橢円形で、長軸23cm、短軸16cm、深さ5cmを測る。埴輪の復元底径は13cm前後であり、掘方短軸の数値と近い。底部形状も橢円形であり、それに合わせて掘方を掘削したと考えられる。

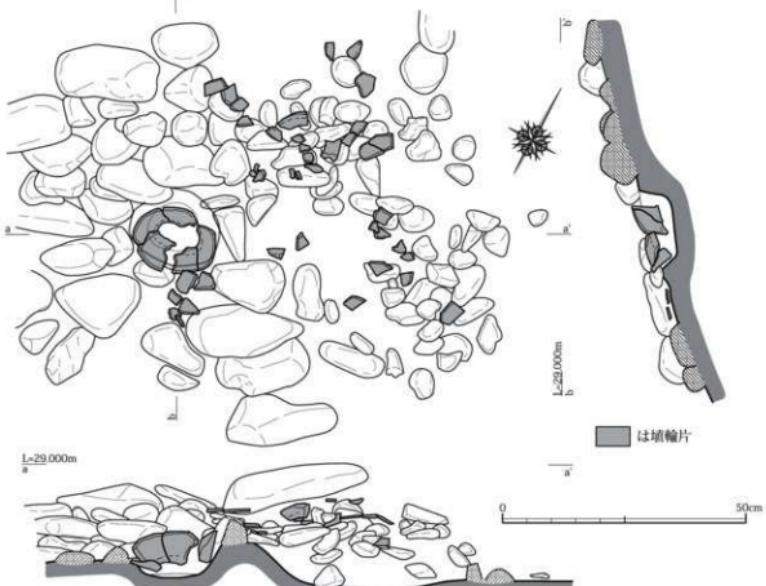
**埴輪⑦（掲載番号16）** 埴輪⑥の北東側、約1.5mの間隔を置いて検出した。樹立用の掘方内から底部片が出土した。掘方は平面橢円形で、長軸18cm、短軸15cm、深さ6cmを測る。埴輪の復元底径は12cm前後であり、掘方短軸に近い数字である。

**埴輪⑧（掲載番号10）** 埴輪⑦の北東側、約0.7mの間隔を置いて検出した。埴輪は樹立用の掘方から、底部がやや傾いているもの設置されたような状況で出土した。掘方は橢円形で長軸18cm、短軸16cm、深さ5cmを測る。埴輪の復元底径は最大15cmであり、掘方との差は小さい。

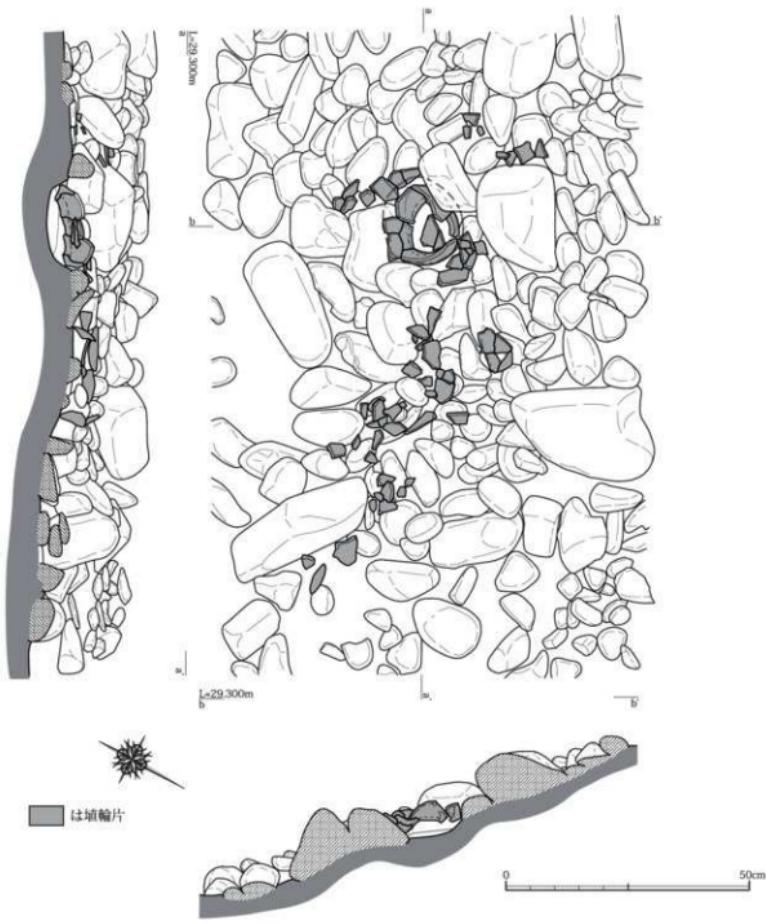
**埴輪⑨** 埴輪⑧の北東側、約2.3mの間隔を置いて検出された。埴輪は樹立用の掘方内から底部片が



第15図 14dトレンチ埴輪⑥出土状況 (S=1/10)



第16図 14dトレンチ埴輪⑦出土状況 (S=1/10)

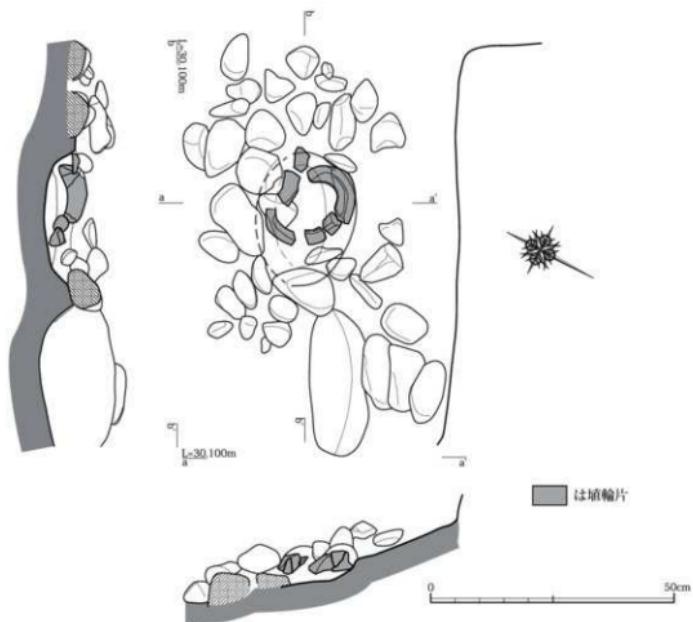


第17図 14dトレンチ埴輪⑧出土状況 (S=1/10)

出土した。出土位置は掘方内の中央ではなく、長軸側にやや偏っている。掘方は平面楕円形で長軸27cm、短軸21cm、深さ6cmを測る。

**埴輪⑩（掲載番号2）** 後円部1段目テラスのくびれ部寄りで検出された。出土状況は敷石上に散在する状況で掘方は確認されていない。出土部位も、接合し、図化が可能だったものは壺形埴輪の二重口縁部である。出土状況やそのくびれ部に近い出土位置から、後円部と前方部を結ぶスロープ上に樹立されていた埴輪が転落し、テラス面で止まり出土した可能性が高い。

**埴輪⑪（掲載番号9）** 後円部1段目テラスで検出された。出土状況は、敷石上に散在する破片と、樹立用掘方と思われる掘り込み内から底部片が出土している。底部片の上には蹠が置かれており、



第18図 14dトレンチ埴輪⑨出土状況 (S=1/10)

埴輪樹立用の重りと思われる。掘方は平面円形で直径22cm、深さ9cmを測る。埴輪の底径は最大値が12.2cmであるため、底径の倍程度の掘方を掘削している。ただし、掘方床面の径は12cm程度であるため、安定して設置できたと思われる。

埴輪⑫（掲載番号1） 後円部1段目テラスの北壁付近で検出された。出土状況は敷石上に散在する状況で、底部片も出土しているが樹立用の掘り込みは検出されていない。出土部位は壺形埴輪の二重口縁である。底部片も混在していたが、掘方が確認されなかったことや、口縁部を中心に出土していることから、埴頂平坦面からの転落と想定される。

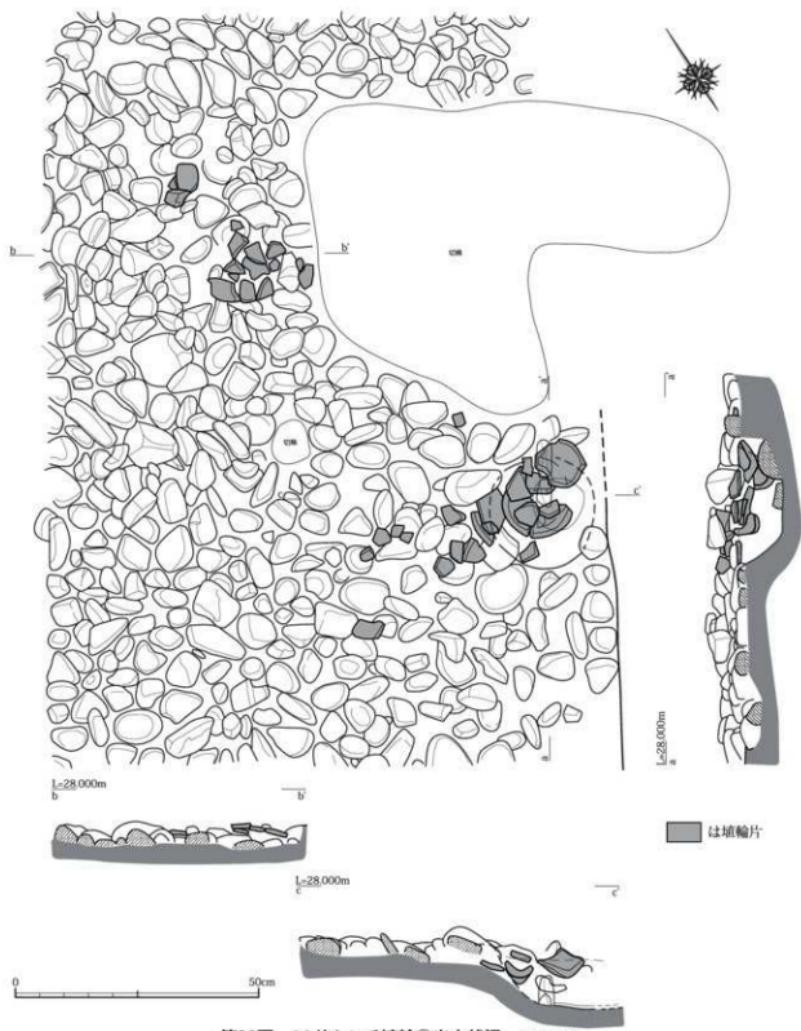
以上のように、前方部埴頂平坦面、前方部と後円部をつなぐスロープ上は、埴輪樹立用の掘方が確認され、さらに掘方内からほぼ原位置を保った状態で底部片が出土していることから、0.8~1.7mの間隔で壺形埴輪が樹立されていたことは確定的である。一方で、後円部1段目テラスに関しては、3ヶ所中1ヶ所で埴輪樹立用の掘方が確認されたものの、他の2ヶ所では埴頂平坦面から転落してきたものと判断された。このため後円部1段目テラスは、掘方が確認された事例があるため、樹立されていた可能性は高いが、広い間隔を開けて樹立したか、かなり変則的ではあるが、くびれ部寄りの埴輪⑪の位置にのみ樹立した可能性もある。14aトレンチにおいて、1段目テラスから壺形埴輪片が出土していないことからも、樹立していたとしても埴頂部のような密な樹立ではなかったことを示している。14号墳の壺形埴輪は、二重口縁と単口縁の二種が確認されている。量的な多寡は二重口縁が中心となるようであるが、配置による使い分けが成されていたのかどうかは、出土位置が確定的なものが底部のみであるため不明と言わざるを得ない。



第19図 14dトレンチ埴輪⑩出土状況 (S=1/10)

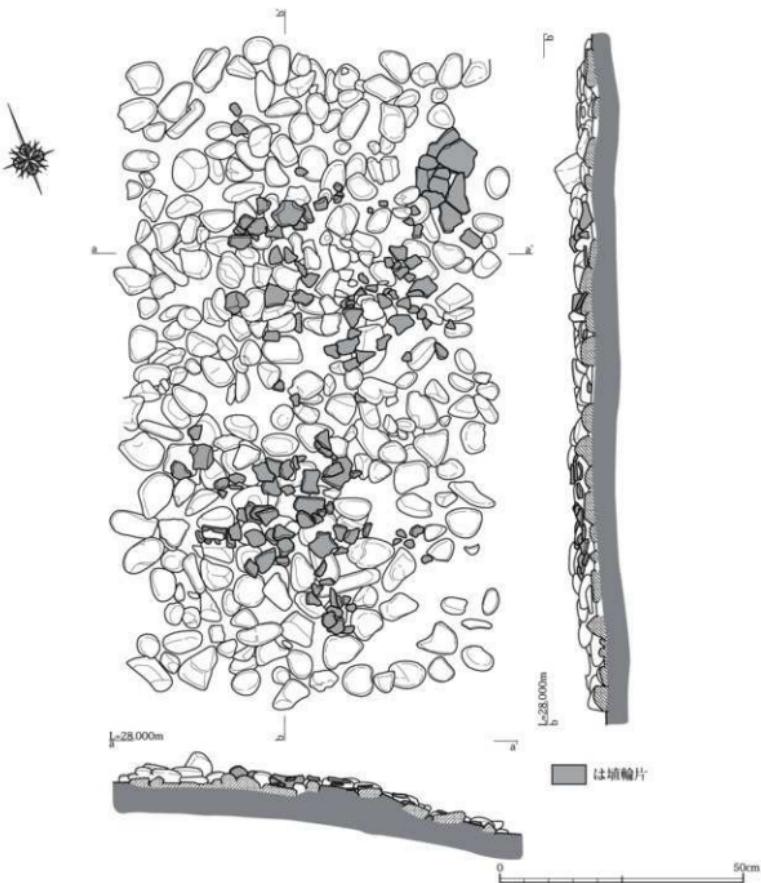
#### (5) 14 e トレンチ

14 e トレンチは前方部東側隅角付近の前方部側面とその周囲に面的に設定した。調査区の南東側は大規模な搅乱を受けており、隅角は確認することができなかった。搅乱を受けていない部分の埴丘は良好な状態で検出され、1段目斜面の葺石が確認された。基底石は、長径30cmほどの砂岩円礫を横位に配置する。基底石の外側には、後円部トレンチで見られたようなテラスは確認されていない。周溝は、植樹による搅乱を受けた部分が多いものの、隅角に向け幅が狭く、深さも浅くなり、取束する状況が確認できた。隅角に近い周溝外縁側立ち上がり付近で、22号地下式横穴墓が検出された。堅坑は平面隅丸長方形を呈し、長軸1.9m、短軸0.8mを測る。堅坑を周溝内に、周溝外縁側に玄室を設けている。堅坑を半裁し調査を行ったが、周溝埋土である黒色土が玄室方向へ流れ込んでいく堆積状況から、閉塞方法は板閉塞と考えられる。玄室は堅坑の長辺側から掘り込まれている。



第20図 14dトレンチ埴輪①出土状況 (S=1/10)

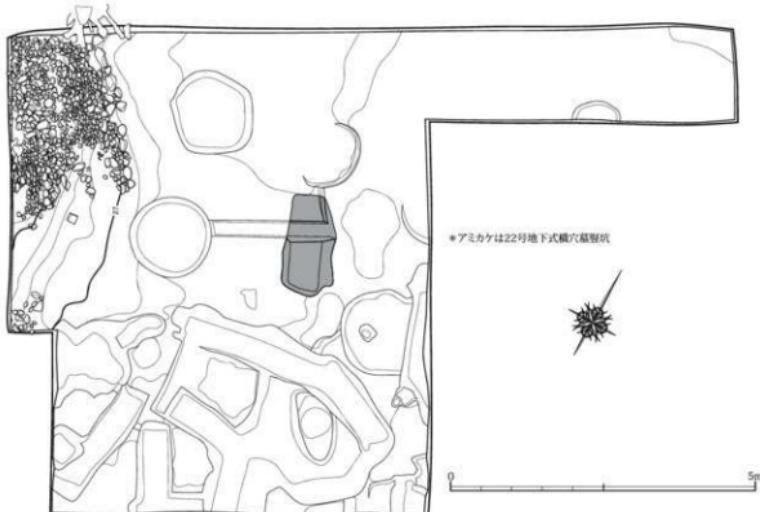
堅坑は深さ0.65mで内部から遺物は出土していない。通常、周溝内に地下式横穴墓を設ける場合、地下式横穴墓の被葬者にとって、古墳の被葬者との関係性を明示するという点と、堅坑の掘削土量を軽減できるという2つの利点があるが、前述のとおり隅角で周溝が収束することから周溝の深さもかなり浅くなっている。この点を鑑みると、22号地下式横穴墓の被葬者は14号墳の被葬者との関係性の明示を強く意識してこの場所に構築した可能性が高い。



第21図 14dトレンチ埴輪⑫出土状況 (S=1/10)

#### (6) 14 f トレンチ

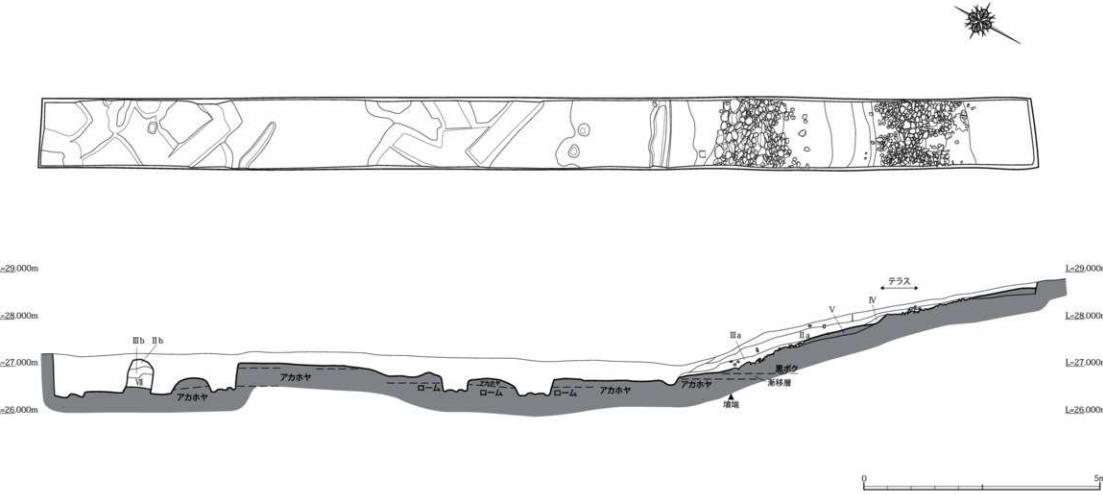
14 f トレンチは前方部前面に墳丘主軸ラインに沿って、墳頂から墳端の外側まで延長して設定した21m×1.5mのトレンチである。調査の結果、段築の状況や前方部前面に周溝が巡らないことが明らかになった。14 f トレンチでは、段築の1段目の高さが1.2m、2段目の高さが0.6mと2段目が1段目の半分の高さであり、くびれ部ほどではないが2段目の低さが特徴である。葺石や敷石は、残存状況は良くないが確認することができた。敷石は墳頂平坦面では3cm程度の小礫を、1段目テラスでは直径10cm程度の礫を敷設していた。ここでも位置により礫の大きさを区別して敷設している。他の調査区の事例と合わせると、基本的に墳頂平坦面に最も小さな3cm程度の礫を敷設



第22図 14eトレンチ実測図 (S=1/80)

し、テラス面は10cm程度の礫を敷設している箇所が多い。礫葺石は長径10~15cm程度の礫を使用し、基底石は長径20cm程度の礫を横位に設置している。周溝は、植栽により著しく擾乱を受けているが、地山が残存している部分においても、周溝状の落ち込みが確認できなかったため、14eトレンチにおいて、前方部隅角に向かって、周溝が収束してくる状況と合わせて考えると、前方部前面には周溝が巡っていなかったと考えられる。また生目古墳群では、14号墳の直後に位置付けられる5号墳においても、周溝が前方部隅角で収束する形態であることからも追認できる。

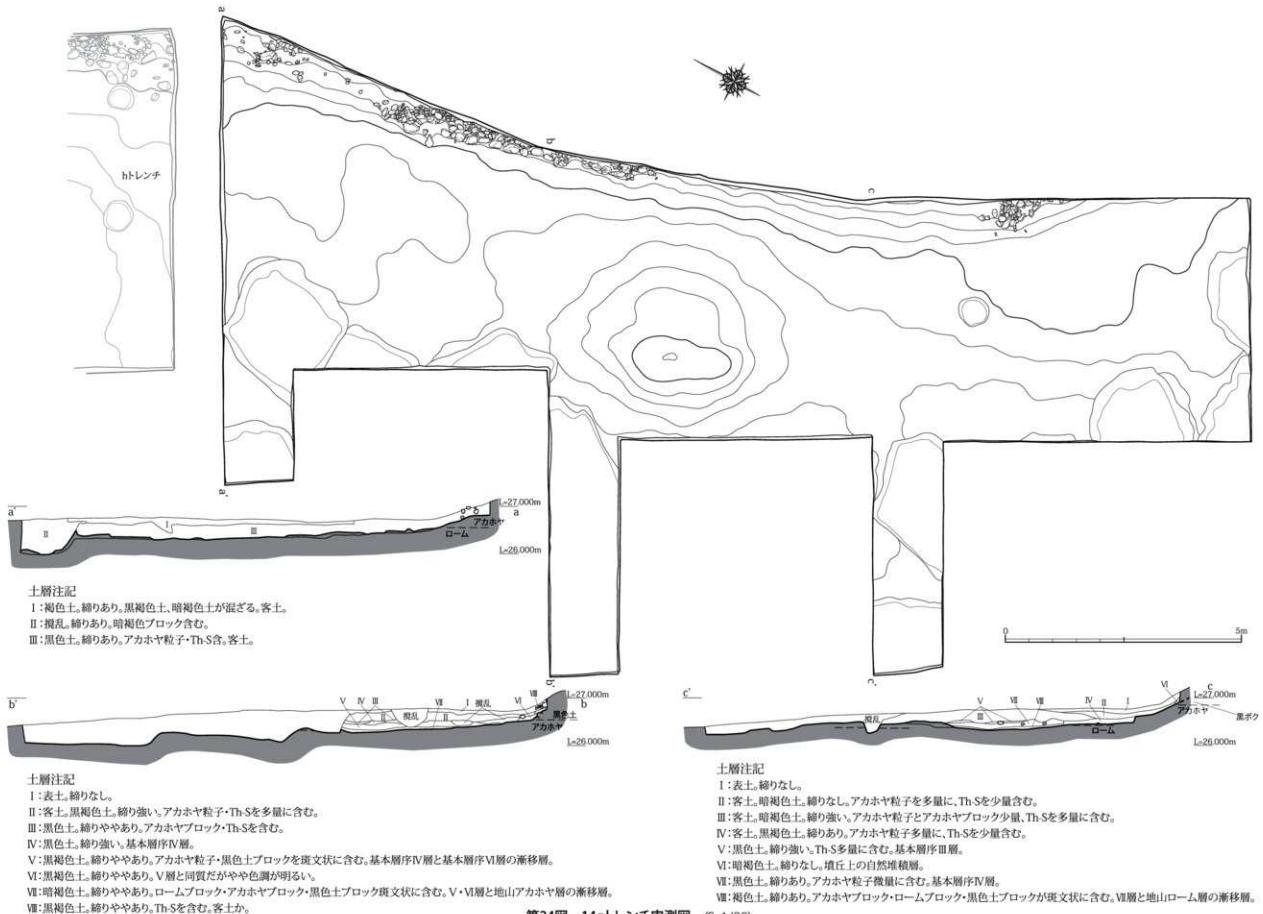
遺物は墳丘斜面から土師器片が出土しているが、調査範囲内では、遺物が集中して出土する位置や、埴輪を設置する掘方も確認されていないことから、墳頂平坦面やテラスにおいて埴輪が樹立さ



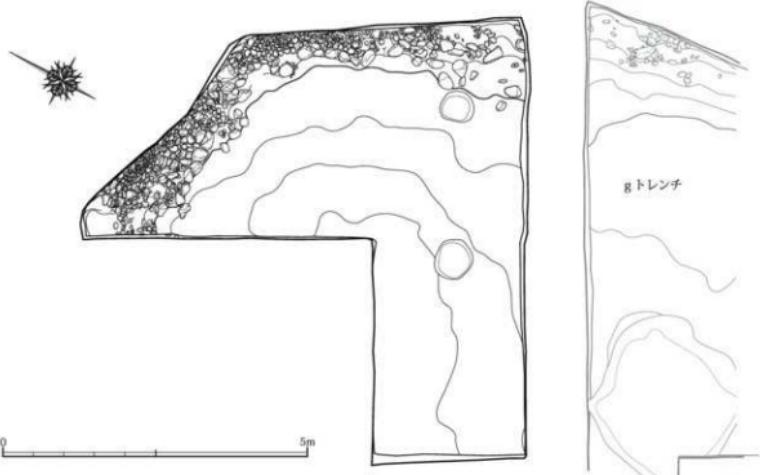
#### 土層注記

- I: 表土。綿りなし。
- II b: 黒褐色土。綿りあり。Th<sub>3</sub>を多量に含む。基本層序III層。
- II b: 黒褐色土。綿りあり。複乱が激しく明瞭でないか遺構埋土の可能性あり。
- III a: 黒色土。綿りあり。アカホヤ粒子を微量に含む。基本層状IV層。
- III b: 黒色土。綿りあり。アカホヤ粒子を微量に含む。複乱が激しく明瞭ではないか遺構埋土の可能性あり。
- IV: 黑褐色土。やや綿りあり。II a層より暗い。アカホヤ粒子とTh<sub>3</sub>を少量含む。流れ込みによる混合土。
- V: 黒色土。綿りあり。III a層より黒味が強い。アカホヤ粒子、5mm程度のアカホヤブロック含む。埴丘盛土。
- VI: 黑褐色土。綿りややあり。アカホヤ粒子少量含む。1cm程度の黄色土ブロック含む。埴丘盛土。
- VII: 褐色土。綿りあり。アカホヤ火山灰。

第23図 14fトレンチ実測図 (S=1/80)



第24図 14gトレンチ実測図 (S=1/80)

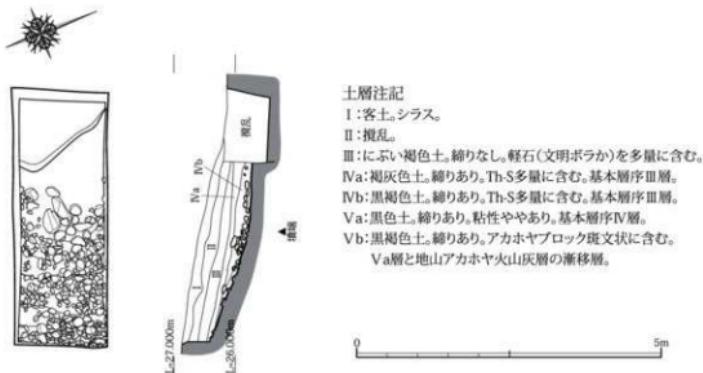


第25図 14h トレンチ実測図 (S=1/80)

れていたかは明らかではない。古墳時代の遺構ではないがトレンチの南東端付近では、搅乱の間から弥生時代中期の竪穴建物と思われる遺構を検出している。14e トレンチでも弥生時代中期段階の土器が包含層から出土していることから、前方部周辺に弥生時代の集落が展開していた可能性がある。

#### (7) 14g トレンチ

14g トレンチは前方部西側に主軸に直交する形で3本のトレンチを設定し、それを拡張する形で、墳端と周溝の状況を明らかにするため調査を行った。調査の結果、調査区の後円部寄りでは一部で基底石と葺石が確認されたが、調査区は全体的に搅乱を受けており、残存状況は悪い。確認された基底石は長径20cm程度の礫を横位に設置している。基底石上の葺石は5~15cm程度のやや小振りの礫を用いている。前方部の隅角は、東側と同様、激しい搅乱によって残存しておらず、詳細な位置は明らかにできなかった。また周溝も搅乱を受けており、残存状況は非常に悪く、外縁側の肩は消失している。ただし残存部分の等高線を追っていくと、東側周溝と同様に前方部隅角部分で取束するようである。調査区の中央付近の周溝内で、黒色土を埋土とする落ち込みを検出した。周溝内という場所から、地下式横穴墓など古墳に関連する施設の可能性も想定し、性格を明らかにするため、セクションを残して掘削した。平面形は楕円形を呈し、長軸4.8m、短軸3.6m、深さ0.4mを測る。断面は緩やかなU字形で、遺物は出土していない。結果として地下式横穴墓ではないことは確認できたが、性格を判断する情報は得られなかった。調査区のセクション位置から離れていたため、周溝との前後関係は明らかではないが、その埋土や墳丘、周溝との関係性が見いだせない位置にあることから、古墳築造に先行する遺構の可能性もある。



第26図 14 i トレンチ実測図 (S=1/80)

#### (8) 14 h トレンチ

14 h トレンチは14 g トレンチ北側、墳丘西側くびれ部の位置に面的に設定したトレンチである。調査の結果、良好な状況でくびれ部の葺石を検出した。基底石は長径30cm程度の礫を横位に配置している。斜面部の葺石は長径5~15cmの礫を使用しているが、前方部より後円部の方が大きめの礫を使用している。基底石の外側に明瞭なテラスや敷石は見られない。これは東側くびれ部を調査した14 d トレンチの調査成果と合致する。墳丘側の調査範囲が狭いため、明確ではないが、縦方向の区画列石が、後円部と前方部の結節点付近で確認される。周溝は調査区のすぐ西側が搅乱により大きく削平されているため、周溝の外縁立ち上がりや肩を確認することができなかった。

#### (9) 14 i トレンチ

14 i は後円部の北西側に墳丘端部から周溝へ向けて設定した4 m × 1.5mのトレンチである。調査の結果、良好な状態で墳端、葺石が検出された。墳端には長径30cm程度の基底石が横位で設置されていた。基底石の外側からはテラスが検出され、敷石を確認している。14 i トレンチでは、敷石中に他のトレンチでは見られない大型の礫も検出されている。周溝は鉄塔の建設によって大きく搅乱されているため、詳細は明らかではない。

#### 【引用・参考文献】

- 橋本達也 2012 「3 地域の展開 ①九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学2、同成社。
- 宮崎市教育委員会 1996 「史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書」宮崎市文化財調査報告書第28集。
- 宮崎市教育委員会 2004 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書V－、宮崎市文化財調査報告書第57集。
- 宮崎市教育委員会 2006 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書VI－、宮崎市文化財調査報告書第61集。
- 宮崎市教育委員会 2007 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書VII－、宮崎市文化財調査報告書第65集。
- 宮崎市教育委員会 2010 「生目古墳群Ⅰ」－生目5号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第80集。
- 宮崎市教育委員会 2012 「生目古墳群Ⅱ」－生目3号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第91集。

## 第4節 出土遺物

### (1) 概略

当墳より出土した遺物のほとんどは埴輪である。特異な形状をしているが、前後の時期に南九州で盛行する壺形埴輪の範疇に含まれるものである。

墳丘に樹て並べられていたため、底部資料の残存率が良く、全周するものが多いが、底部から口縁部までが揃う良好な資料ではなく、特に頸部、肩部の資料が不足するため、全形は復元し難い。総じて極めて薄手で、胎土中には非常に多量の混和材が含有される。黒斑が見られるものが多く、野焼き焼成によるものである。焼成状態はあまり良くなく、焼き上がりが均質ではないため、明るい橙色と灰色の斑になったものが多い。断面は概ね灰色である。

口縁部は二重口縁（1～5）と単口縁（7）のものがあり、数量的には二重口縁のものが圧倒的に多い。二重口縁、単口縁ともに口縁上部が大きく開き、復元ではあるが最大のものは口径50cm以上もある。二重口縁は第1口縁の口唇部面に相当する部分に第2口縁が載り、いわば第1口縁と第2口縁が同化するものが多い（2～5）が、1のみは第1口縁の口唇部面が明瞭に形成され、外見上顕在化している。1・4に残る二重口縁の頸部は、ともに径がやや大きめであるが、1が垂直に近く立ち上がるのに対して4は直線的ながら大きく開く。前述の第1口縁口唇部の顕在化とともに、1はより本来の、ないし古い段階の壺の形態を留めているともとらえられる。単口縁7は口縁部が横方向に大きく開き、また頸部状のくびれが形成されるなど、通有の単口縁壺形埴輪には見られない特徴を有している。

肩部は単口縁7のみに残存するが、頸部状のくびれから明瞭な境をもたずに漸移的に肩部、胴部へとつながり、肩部の張りはほとんどない。二重口縁に接合する肩部は資料がないため確実には分からぬが、単口縁7が頸部状のくびれを持つため、おそらくは同様の形状と思われる。

胴部（8・9）は完全に長胴化しているのみならず、器壁の湾曲もあまり大きくはなく、粗形となる壺からの形状的な乖離が進んでいる。

底部から胴部への立ち上がりは、外見上、底部と胴部の区別がなく、一連のカーブを描くもの（8・9・14）と、底部からやや垂直に近く立ち上がったのち、湾曲した胴部へと繋がるもの（10・12・13）とがあり、前者のはうが、より壺としての形態を保っている。

底部孔は製作の当初から孔が形成されたドーナツ状の基底部の上に胴部を積み上げて成形され、底部孔周辺は極端に肥厚する。底部孔の成形法には、ナデによって整えられ、内面向かって方形に突出する断面L字状のもの（8～11・14）と、同じくナデによって整えられ胴部から底面に向かって徐々に肥厚する断面三角形状のもの（12・13）、断面三角形状だが、内面の底部孔部分は指頭押圧によるもの（15・16）の三種が認められる。指頭押圧によるものは他のものに比して焼き上がりが良いようであり、全体の形状も整っているように感じられる。

以上に当墳出土埴輪の概略を述べたが、その時間的位置付けについては、過去に生目5号墳出土の同種の埴輪とともに検討を行っている（宮崎市教委 2010）。詳細はそちらを参照していただきたいが、当墳出土の埴輪と5号墳出土の埴輪は製作法等、共通する部分が見られ、近接した時期のものであることは間違いない。ただし14号墳の方がより壺としての形態を残しており、相対的に5号墳に先行すると考えられる。生目古墳群内における前後の首長墓の時間的位置付け等も勘案し、生目14号墳の埴輪は集成編年4期末に位置付けられる。

## (2) 詳述

以下、各資料について詳述する。なお掲載の遺物はいずれも過去に概要報告書で報告しており、過去報告における対応は観察表(42頁第2表)に記している。

①壺形埴輪 第27図～第29図 1～16

【口縁部(二重口縁)】第27図 1～5

1は第2口縁から頸部までであるが、同一の可能性が高い各部位の個体を図上で復元したものである。頸部はやや外傾するが、ほぼ垂直に近く立ち上がって第1口縁に繋がる。第1口縁は外側に大きく開き、ほとんど湾曲することなく直線的に伸びる。第1口縁の口唇部も丁寧なナデによって面が形成され、第2口縁は内面の上端に載るため、第1口縁の口唇部も外見上、顎在化している。一部第2口縁が剥落した器面の観察が可能な箇所があるが、圧着を強固にするための刻み等は見られない。第2口縁は外湾して大きく開き、口唇部は面が形成され断面方形状となる。

2は第2口縁口唇部から第1口縁の途上までであるが、全周する。大きさに比して極めて薄手で、そのためか大きく歪むが、上から見ると径45cm前後ではほぼ正円に近い形状である。第1口縁は若干内湾気味である。第2口縁は外湾して大きく開き、口唇部は面が形成され断面方形状となる。外面は丁寧なナデにより、平滑に整えられていたようである。

3は第2口縁口唇部から第1口縁の途上までが残る。外面は丁寧なナデにより平滑に整えられる。第2口縁は非常に短いが外側に強く屈曲し、口唇部は面が形成され方形状の断面形となる。

4は口縁部から頸部の一部までが残る。頸部は径が大きく、外傾して直線的に立ち上がる。第2口縁もあり外湾せず、外傾して直線的に伸びる形状のようである。第2口縁口唇部は細く尖り気味に整えられており、口唇部の面は形成されない。

5は復元径33.8cmで、当墳の二重口縁の中ではやや小振りな方である。整形は丁寧に行われており、全体に整った印象を受ける。やや不明確であるが、外面のごく一部に赤色顔料かと思しき痕跡が観察される。

【口縁部(單口縁か)】第28図6

6は口縁部小片で歪みが非常に大きい。復元径や形状が後述の7に類似し、單口縁の可能性が高いと思われるが、二重口縁の第2口縁である可能性もある。口唇部の形状は一部、断面方形に近い箇所もあるが、全体に丸味を帯びている。後述の底部11とともに出土しており、同一個体と考えられる。

【口縁部(單口縁)～肩部】第28図7

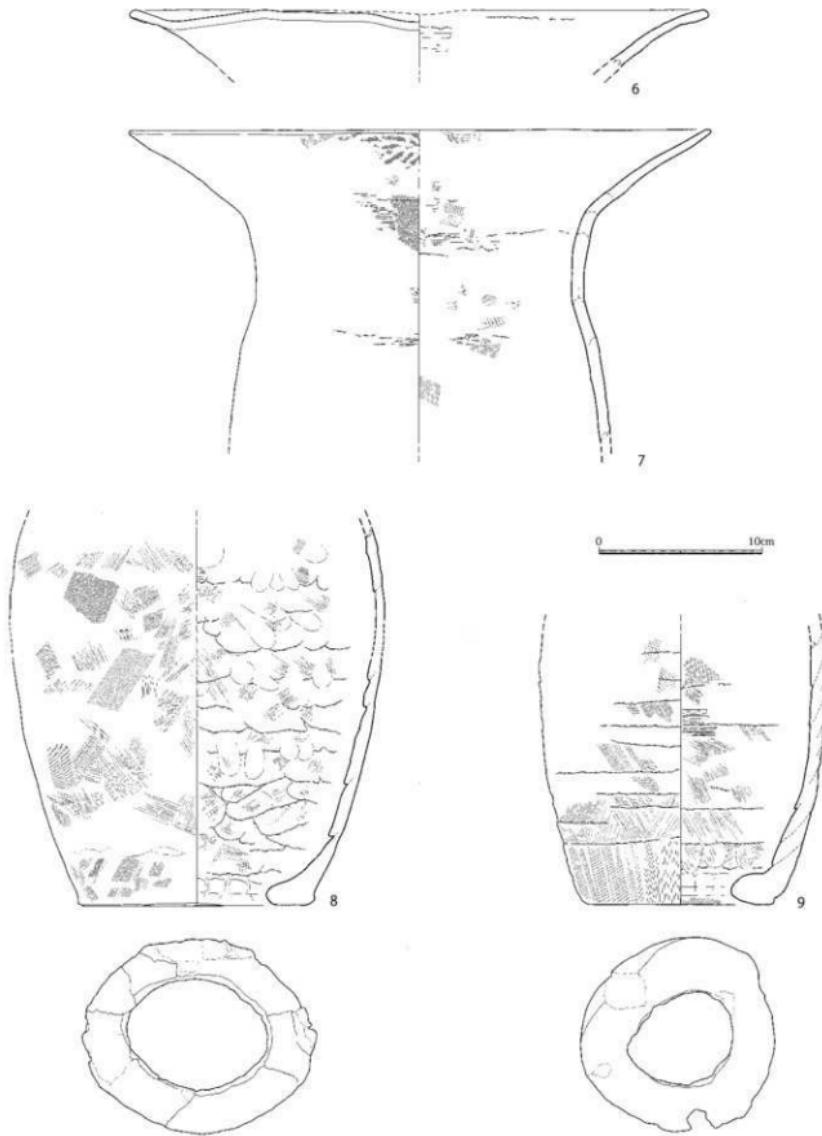
7は口縁部から肩部までが残る。單口縁であるが、口縁部が横に大きく開き、通有の單口縁壺の口縁部形状とは大きく異なる。口径が二重口縁1・3の第1口縁の径と近似しており、二重口縁の第2口縁が省略されたものとも見えるが、口縁部先端が細く尖り気味に整えられ、口唇部として完結しており、意図的に單口縁として仕上げられている。口縁部から頸部、肩部にかけて、稜の入らない自然なカーブを描き、そのため、各部位の別は不明瞭である。頸部に相当する部位の径は大きく、口縁部と肩部の間にかろうじてくびれが形成されている程度である。肩部も張り出しが弱く、緩やかに胴部へと至る。

【胴部～底部】第28図8・9

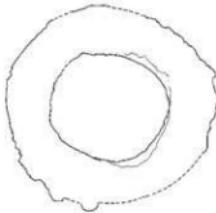
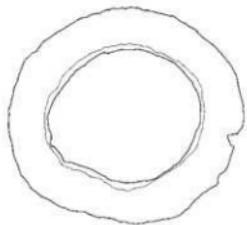
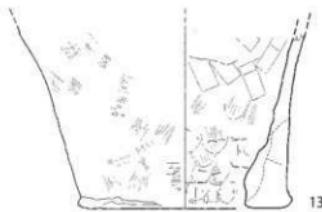
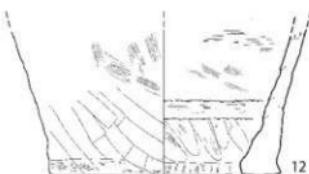
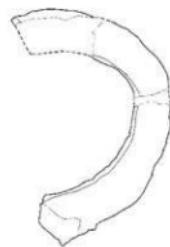
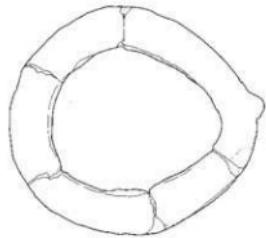
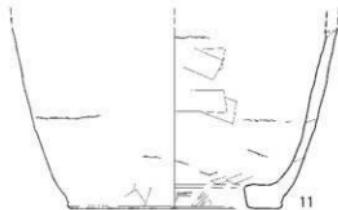
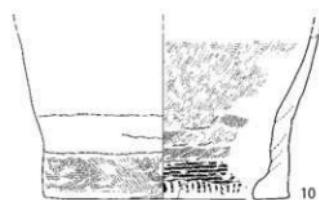
8は胴部上半から底部までが残る。底部は全周し、径は10.8～13.7cmでやや橢円形である。底部

第27図 生目14号填出土遺物① (S=1/3)





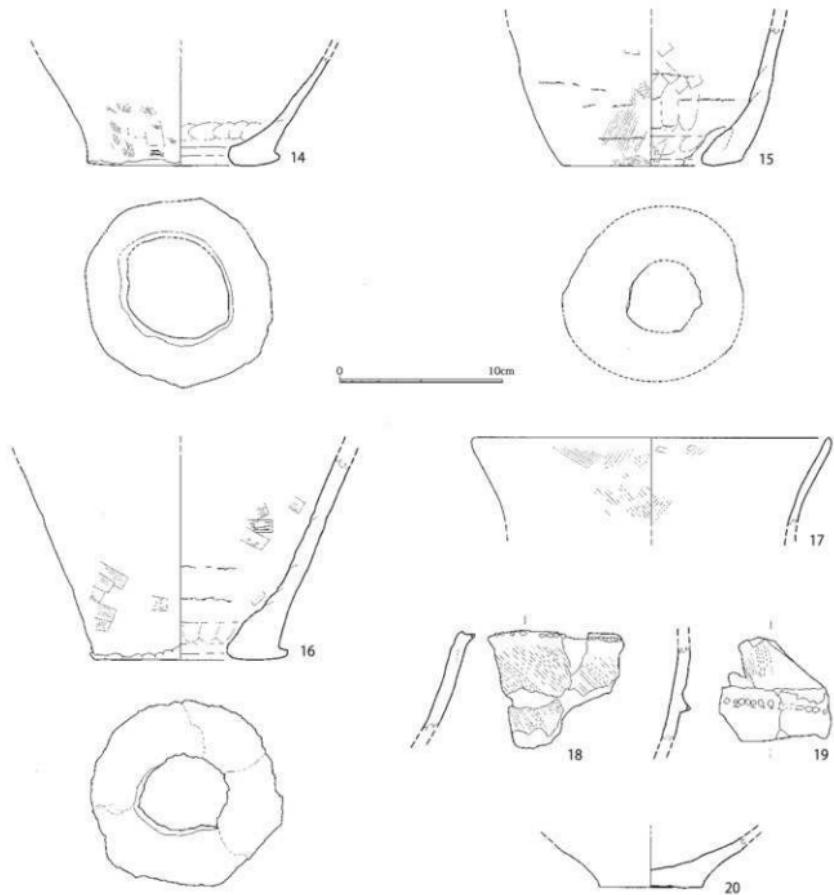
第28図 生目14号出土遺物② (S=1/3)



0 10cm

第29図 生目14号墳出土遺物③ (S=1/3)

孔周辺は肥厚するが、外面、内面ともに緩やかにカーブを描いて胴部へとスムーズに繋がる。底部孔内面はナデによって整えられるが、他の個体ほど丁寧には整えられておらず、底面の一部は円盤状に外面にはみ出している。胴部内面の粘土縫ぎ目はほとんどナデ消されておらず、幅2cm弱の粘土紐の単位が明瞭に残る。



第30図 生目14号墳出土遺物④ (S=1/3)

9は胴部中ほどから底部までが残る。底部は全周し、径は11.0~12.2cmでやや楕円形の印象を受ける。底部孔周辺は肥厚して内面に突出し、断面L字状になる。底部部分と胴部との接合箇所における粘土継ぎ目も明瞭に残り、ドーナツ状の底部に胴部を積み上げて行ったことがわかる。磨滅が激しいが、底部孔周辺や底部と胴部との境などに稜が立たず、全体に丸みを帯びた印象を受ける。

【底 部】 第29図10~13、第30図14~16

10は底部が全周し、底径は13.7~15.0cmでやや楕円形である。外面上、底面から5cmほどの高さまで直立に近く立ち上り、緩く内湾した胴部へとつながる。底部孔周辺は大きく方形状に肥厚して

内面に突出し、断面L字状になる。底部孔周辺はすべての面が丁寧なナデによって整えられている。外面、内面ともに粘土離ぎ目が完全にはナデ消されていない。

11は約半周が残る底部である。底部孔周辺は肥厚して内面に突出した断面L字状になるが、突出部分は丁寧なナデによって方形に整えられている。全体に磨滅が激しい。前述の口縁部6とともに出土している。

12は径14cm前後の底部が全周し、ほぼ正円である。底面から直線的に外傾しながら立ち上る。底部孔周辺が肥厚するが、胴部から底面にかけて徐々に肥厚する断面三角形状である。底部孔内面は丁寧なナデによって整えられる。底面も平滑にナデされるが、棒状の圧痕が一ヶ所見られる。底部周辺の内面のナデはあまり丁寧ではなく、粘土離ぎ目が明瞭に観察される。また外面にも一部粘土離ぎ目が観察できる。

13は径12~13cmで全周し、正円に近い。底面からやや外傾して直線的に立ち上がり、残存する胴部の最上部で若干カーブを描き始めるようである。胴部から底面に向かって徐々に肥厚し、断面三角形状になっている。底部孔周辺における整形は他の個体に比してやや粗雑であり、底面の数か所において外面に粘土がはみ出している。

14は径12cm前後で底部が全周し、ほぼ正円に近い。特に磨滅が激しいが、底部孔の整形具合や胴部への繋がり、底面の一部が円盤状に外面にはみ出す形状など、前述の8に類似する。

15は一部欠損しているが、全周に近く残る。底部孔にかけて肥厚していき、断面三角形状になる。底部孔は指頭押圧痕をそのまま残し、他の多勢を占める個体とは製作法が異なっている。外面に明瞭な黒斑が認められるが、焼成状態は当墳出土埴輪中、最も良い。

16は径11cm前後で全周し、正円に近い。前述の15と同じく底部孔は指頭押圧による。底面からやや外湾気味に立ち上ったのち、内湾した胴部へと繋がる形状で、通有の壺形埴輪の形状に最も近い印象を受ける。

## ②土 器 第30図17~20

17は土師器壺口縁部である。先の概要報告書において壺形埴輪口縁部として報告したが（宮崎市教委 2004）、当墳における埴輪資料の増加に伴なって再検討を行い、形状や焼成状態の異同から埴輪ではなく土師器と判断した。

18~20は周溝内の搅乱および堆積土中より出土した中期中葉～中期末の弥生土器である。18は貼り付け口縁に、19は貼り付け突帶に、それぞれ刻みによる列点文が施文されている。

### 【引用・参考文献】

宮崎市教育委員会 2004 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書V－、宮崎市文化財調査報告書第57集。

宮崎市教育委員会 2006 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書VI－、宮崎市文化財調査報告書第61集。

宮崎市教育委員会 2007 「史跡生目古墳群」－保存整備事業発掘調査概要報告書VII－、宮崎市文化財調査報告書第65集。

宮崎市教育委員会 2010 「生目古墳群Ⅰ」－生目5号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第80集。

第2表 出土遺物觀察表

規格番号	器種	部位	法量(gm) 差(±) 銅 底		機械	色調				粒土	特記事項	過去報告対応	注記号		
			外面	内面		外面	内面								
第25回 (35頁)	1	痘形頭輪	口輪部 (二重1層)	(334)	-	やや不真	暗 5YR7/6	暗 5YR7/6	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	外面、内面と 底に一部黒鉄	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10908	14D333 - 14D332 14D334		
	2	痘形頭輪	口輪部 (二重1層) (全周)	411~ 462	-	やや不真	黄褐 10YR8.8	暗 5YR7/6	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	外面、内面と 底に一部黒鉄	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10902	14D328 - 14D329 14D330 等		
	3	痘形頭輪	口輪部 (二重1層)	(462)	-	やや真	暗 5YR7/6	浅黄褐 73YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	外面、内面と 底に一部黒鉄	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10903	14D192 - 14D296 14D172 等		
	4	痘形頭輪	口輪部 (二重1層)	(382)	-	やや不真	浅黄褐 73YR8.8	暗 5YR7/6	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄多	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10904	14D333 等		
	5	痘形頭輪	口輪部 (二重1層)	(338)	-	やや真	浅黄褐 73YR8.8	浅黄褐 10YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	外面赤鉄粉 付着多	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10901	IMK14D326 - 14D325 - 14D407		
第26回 (36頁)	6	痘形頭輪	口輪部 (單 口輪少)	(356)	-	やや不真	浅黄褐 73YR8.8	暗 5YR7/6	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄多 付着有	宮崎市57集 生 古占原町秋葉原 第10925	IMK14D141に付 TMK4D1-1等		
	7	痘形頭輪	口輪部 (單 口輪少)	(358)	-	やや不真	黄褐 73YR8.8	浅黄褐 73YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄多 付着有	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10906	14D198 - 14D326 等		
	8	痘形頭輪	胴部-前部	-	-	10.8~ 13.7	やや不真	浅黄褐 73YR8.8	浅黄褐 10YR8.8	工具ナチュラル ササキ オサキ	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石數割有	外面黒鉄付 有黒鐵 黒鉄底 内面黒鉄	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10905	IMK14D322 - 14D304	
	9	痘形頭輪	胴部-前部	-	-	11.0~ 12.2	やや不真	浅黄褐 10YR8.8	浅黄褐 73YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	外面黒鉄付 有黒鐵 黒鉄底	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10907	14D315 - 14D316 - 14D309	
	10	痘形頭輪	底部 (全周)	-	-	137~ 150	やや不真	浅黄褐 73YR8.8	灰白 10YR7/1	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄一部黒 黒鉄一部黒土 黒鉄一部黒土 外黒鉄にのみ 含有	宮崎市57集 生 古占原町秋葉原 第10907	14D82 - 14D325 - 14D326 等	
第27回 (39頁)	11	痘形頭輪	底部 (1/2)	-	-	142	やや不真	暗 5YR7/6	浅黄褐 73YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄一部黒 黒鉄一部黒土 黒鉄一部黒土 外黒鉄にのみ 含有	宮崎市57集 生 古占原町秋葉原 第10926	IMK14D141に付 TMK4D15等	
	12	痘形頭輪	底部 (全周)	-	-	132~ 145	やや不真	暗 5YR8.8	浅黄褐 73YR8.8	工具ナチュラル ササキ オサキ	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石數割有	黒鉄一部黒 黒鉄一部黒土 黒鉄一部黒土 外黒鉄にのみ 含有	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10911	14D364 - IMK14D321	
	13	痘形頭輪	底部 (全周)	-	-	121~ 130	やや不真	暗 5YR7/6	黄褐 10YR8.8	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	外黒鉄部付 有黒鐵 黒鉄底 黒鉄多	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10912	14D194 - 14D320 等	
	14	痘形頭輪	底部 (全周)	-	-	11.8~ 12.2	やや不真	暗 5YR7/8	暗 5YR7/6	工具ナチュラル ササキ オサキ	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	黒鉄一部黒 黒鉄多 黒鉄底 黒鉄多	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10910	14D318 - 14D322 - 120 - 206 等	
	15	痘形頭輪	底部 (4/5)	-	-	10.5~ 11.0	良好	浅黄褐 73YR8.8	浅黄褐 73YR8.8	ナチュラル	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	黒鉄一部黒 黒鉄底 黒鉄多	宮崎市57集 生 古占原町秋葉原 第10927	IMK14D12に付 TMK4D15
第30回 (40頁)	16	痘形頭輪	底部 (全周)	-	-	11.1~ 11.6	良好	暗 5YR8.8	浅黄褐 73YR8.8	ナチュラル	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有 3mmの大の小石少含有	黒鉄一部黒 黒鉄底 黒鉄多	宮崎市65集 生 古占原町秋葉原 第10928	IMK14D12に付 TMK4D15
	17	土脚部	口輪部 (220)	-	-	良好	暗 73YR7/6	暗 5YR7/6	工具ナチュラル	1~3mmの黒色鉄、灰色鉄、 赤褐色を含めて多量に含有	黒鉄一部黒 黒鉄底 黒鉄多	宮崎市57集 生 古占原町秋葉原 第10929	IMK14D45		
	18	強生土器	口輪部	-	-	良好	暗 73YR7/6	浅黄褐 73YR8.6	ナチュラル	3mm以下の赤褐色、灰色鉄 を含有	口輪部刷毛列 立丸	宮崎市61集 生 古占原町秋葉原 第10930	IMK14E4H65HD IMK14E4H 11HSD IMK14EHEBR5D		
	19	強生土器	胴部	-	-	良好	暗 73YR7/6	暗 5YR7/6	ハサカ ナチュラル	3mm以下の赤褐色、灰色鉄 を含有	交番組み列点 文	宮崎市61集 生 古占原町秋葉原 第10931	IMK14E4H IMK14E4H 11HSD IMK14EHEBR5D		
	20	強生土器	底部 (全周)	-	-	6.4	やや不真	由 73YR7/6	灰 73YR5.1	ナチュラル	1mm以下の白色鉄を多量に含有 4mm以下の赤褐色、 灰色鉄を含有	黒鉄多	宮崎市61集 生 古占原町秋葉原 第10932	IMK14E4H4H5D	

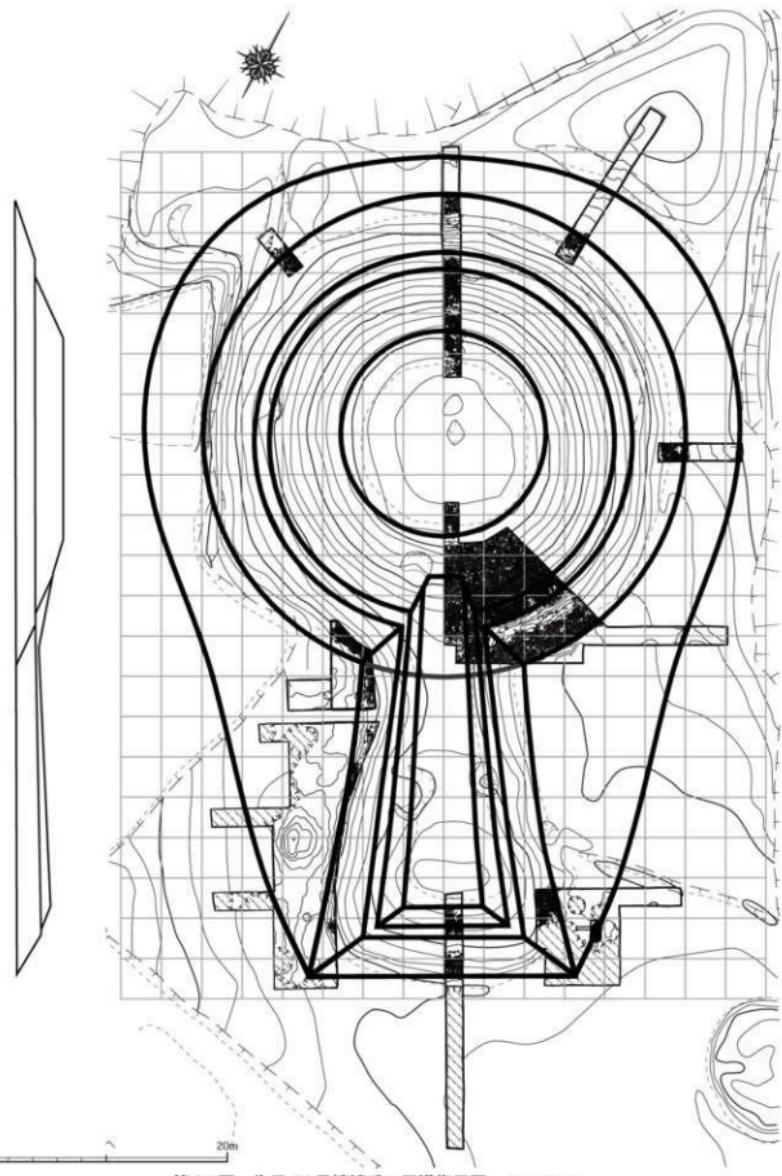
## 第Ⅲ章 総括

### 第1節 生目14号墳の墳丘形態について

調査の結果、後円部、前方部ともに2段築成であることが明らかになっている。前方部側面の段築の状況など、情報が不足している部分もあるが、これら発掘調査成果を踏まえて、墳丘企画の復元を行ったのが第31図である。復元に関しては、沼澤農の24等分値企画法（沼澤2005）を参考にした。14 hトレンチでは、後円部基底石が復元後円部基底円周の内側に入っているが、これは地形的制約などの要因により生じたもので、本来は正円で企画されたと考え、その他各トレンチの調査状況に合わせて円を描いた。また基底部のテラスは不明瞭な部分も多く復元していない。1段目テラス、墳頂平坦面は14 aトレンチ、14 dトレンチの調査状況から復元した。後円部1段目テラスから前方部1段目テラスへは、やや下降傾斜しながらスロープ状に接続し、前方部前面に向かって上昇する。前方部形状については、前方部前面に位置する14 fトレンチ、前方部側面の14 e、14 g、14 hの調査成果から復元した。前方部側面据のラインは、14 gトレンチの基底石の並びや等高線から、前方部隅角に向かって緩やかに屈曲しながら開く形状としているが、直線的に開く形状であった可能性もある。また前方部前面の基底石列が、東側よりも西側が北方向へ入り込み、前方部前面のラインが墳丘主軸に対して僅かではあるが斜交する形状となっているが、やはり本来的な企画は主軸に直交する形狀であったと思われ、施工の段階で生じたものと思われる。隅角は東西ともに失われていたため、前方部側面ラインと、前方部前面ラインを延長し、両者が交わる位置に復元した。前方部の1段目テラスは側面での確認を行っていないため、前方部前面とくびれ部を結んで、強引ではあるが復元した。前方部の墳頂平坦面は、後円部墳頂平坦面へとスロープ状の斜道が伸び接続している。ただしこのスロープは後円部墳頂まで伸びず、後円部2段目斜面の途中に接続する。スロープと後円部2段目斜面との間には明確な傾斜変換点はなく、一見、中途半端な接続であるが、14号墳では前方部墳頂平坦面、スロープ上、後円部2段目斜面全てが疊で覆われているため、視覚的に違和感はない。スロープと後円部2段目斜面の境界は、スロープの両肩位置に並べられた区画列石が途切れる位置に当たると思われる。

墳丘基底部の標高は後円部背面で25.9m、くびれ部で26.3m、前方部前面で26.9mと前方部から後円部に向け緩やかに下降傾斜しており、後円部背面と前方部前面では1 mの比高差がある。1段目テラスの標高は、2段目斜面基底部で比較すると、後円部背面で27.8m、くびれ部後円部側で27.9m、前方部前面で28.1mと僅かに前方部前面が高いものの、比高差は0.3mに減少しており、墳丘1段目において高低差が補正され水平に近づいている。墳丘斜面の平面形における比率は、後円部が下段から1:15、前方部が下段から2:1となっている。

14号墳の墳丘形態の特徴として、後円部径に対して前方部長が短いことが挙げられ、その比率は後円部1:前方部0.62（以下後円部を1とした際の前方部の数値のみ記載する）となる。生目古墳群の他の前方後円墳の中で、発掘調査で数値が明らかなものは、3号墳0.78、5号墳1.04、7号墳0.92、21号墳0.65となり、14号墳の数値は墳長33mと小型の前方後円墳である21号墳に近しい数字となる。また14号墳の前段階の首長墓である22号墳は、3号墳の相似形墳とされていることから、多少の誤差を含んでも0.78前後と14号墳とは大きく異なり、14号墳に後出する首長墓である5号墳



第31図 生目14号墳埴丘・周溝復元図 (S=1/400)

第3表 14号墳墳丘復元法量

墳丘長	63m
後円部径	39m
前方部長	24m
くびれ部幅	13m
前方部幅（復元）	19.5m
後円部高	4.5m
前方部高	1.8m
後円部と前方部の比高差	2.7m
段築	後円部 前方部
	2段 2段

大きいため、14号墳は別の企画により築造されたと想定される。

## 第2節 生目14号墳の葺石・敷石について

各トレンチにおいて、墳丘斜面で葺石が比較的良好な状態で検出されるとともに、墳頂平坦面やテラス、後円部墳丘端周囲の一部では敷石が確認され、墳丘全面が礫によって被覆されていることが明らかになった。このように墳丘全面を礫によって被覆する構築方法は、生目3号墳、生目22号墳においても確認され、構築方法の継承が伺える。葺石材は砂岩を主体とする円礫を用いており、5号墳と同様に近接する大淀川から搬入されたものと推察される（宮崎市教委2010）。

14号墳は葺石、敷石の構築方法も特徴的である。墳丘基底部、1段目斜面の基底部という横方向の傾斜変換には、明確な区画列石を配するが、縦方向の区画に関しては、くびれ部や、後円部と前方部をつなぐスロープ部以外では明確な区画列石を配せず、「10cm程度の群」、「15cm程度の群」というように一定の範囲の石の大きさを揃えることで区画を造り出している。この区画を石の大きさで区別する方法は敷石にも採用されている。このように区画列石をほとんど用いないが、施工が決して粗雑なわけではなく、礫の配置は非常に丁寧であり、5cm程度の礫を使用する箇所では、竹串も通らないような密な施工も見られる。葺石の施工方法は、礫の小口面を墳丘斜面に突き刺して定着させており、葺石を正面から見ると、礫がやや上方を向いている。葺石を固定するための粘土等の補強材や裏込めの礫は検出されていない。裏込めを用いず、基底石を配置した後に、一定の角度で積み上げて行くこの施工方法は、縦方向の区画列石が希薄である点など若干の相違も見られるが、大系統的には廣瀬覚氏による分類のC類に当たり、その出現は古墳時代前期中葉（集成編年3期）とされている（廣瀬2011）。

墳丘基底部周囲の敷石は、過去に生目5号墳の報告書内において、生目古墳群の他の前方後円墳とともに考察されている。その中で14号墳は墳丘周囲の敷石を有しないと報告されているが、本報告書では調査状況を整理する中で、後円部の一部に墳丘周囲の敷石を有するとの見解に至り報告した。ただし後円部の一部でのみ見られる不完全なものであり、5号墳の報告書の記載どおり、葺石、敷石の有り方から見ると、14号墳は3号墳、22号墳より退化傾向にあることは間違いない。また14号墳に後出する5号墳では、墳頂平坦面とテラス面の敷石も省略されている。他地域の調査事例も踏まえると、前期古墳では、中山大塚古墳の前方部墳頂平坦面や、玉手山1号墳の墳頂平坦面とテ

も1.04と14号墳とは大きく異なる。墳丘規模を考慮する必要もあるが、連続する首長墓でありながら、各代で墳形を大きく変化させたことが明らかである。14号墳は以前、柳沢一男により西殿塚類型とされ（柳沢1997）、その後の発掘調査成果を受け撤回されている（柳沢2011）。また有馬義人は西都原100号墳、173号墳とともに箸墓亞類型と位置付けている（有馬2006）。有馬が類型とした3墳を比較すると、14号墳は後円部2段築成であるのに対し、100号墳、173号墳は3段築成であり、後円部と前方部の比率も、100号墳0.75、173号墳0.70と開きが

ラス面、玉手山3号墳、7号墳、9号墳のテラス面など、埴丘平坦面に敷石を施すものが確認されている。そのため古墳時代前期には、平坦面にも礫を敷設する古墳が一定程度存在することは明らかである。それが古墳時代中期に近づくにつれ、平坦面への礫の敷設が省略されていくことになるが、その省略の過程が生目古墳群内において表徴されている。

### 第3節 生目14号墳の位置付けについて

調査の結果、14号墳は出土した壺形埴輪から、集成編年4期末に位置付けられた。生目古墳群におけるこの時間的・位置付けは、墳長101mの22号墳に後続し、墳長57mの5号墳に先行する位置に当たる。前段階の22号墳の規模と比較すると、2/3程度の規模であり、生目古墳群を築造した勢力の衰退を表していると考えられる。後続する5号墳はほぼ同規模であり、5号墳の後、集成編年8期の7号墳まで前方後円墳の築造が停止する。第32図を見ると、14号墳を始め、埴輪を有しているのは主に南半支群で、北半支群で有しているのは、5号墳のみである。時期が不明である23号墳に留意する必要はあるが、現段階で5号墳は、生目古墳群における連続した首長墓系譜の最後の古墳と考えられ、この段階によくやく北半支群でも埴輪を導入したと考えられる。ここから地形的な区分に加え、埴輪樹立の有無によっても、両支群を区分できる可能性がある。21号墳において少量の底部穿孔二重口縁壺を用いた祭祀に始まった南半支群の壺形埴輪の樹立は、22号墳で一定量の樹立を達成し、14号墳に引き継がれている。14号墳では調査範囲内において、墳頂平坦面の両肩に0.8m~1.7m程度の間隔をもって樹立されていたことが明らかになっており、後続する5号墳が丘陵下部方向にのみ樹立していたことを合わせると、22号墳とともに、生目古墳群において最も埴輪祭祀が盛行した古墳と言える。

生目14号墳は、縮小した埴丘規模から、生目古墳群を築造した勢力の衰退への過渡期にある古墳と位置付けられ、それと同時に、敷石帶の退化傾向が見られることから、前期的な古墳の築造方法から中期的な古墳の築造方法への転換期にある古墳と位置付けられる。

#### 【主要引用・参考文献】

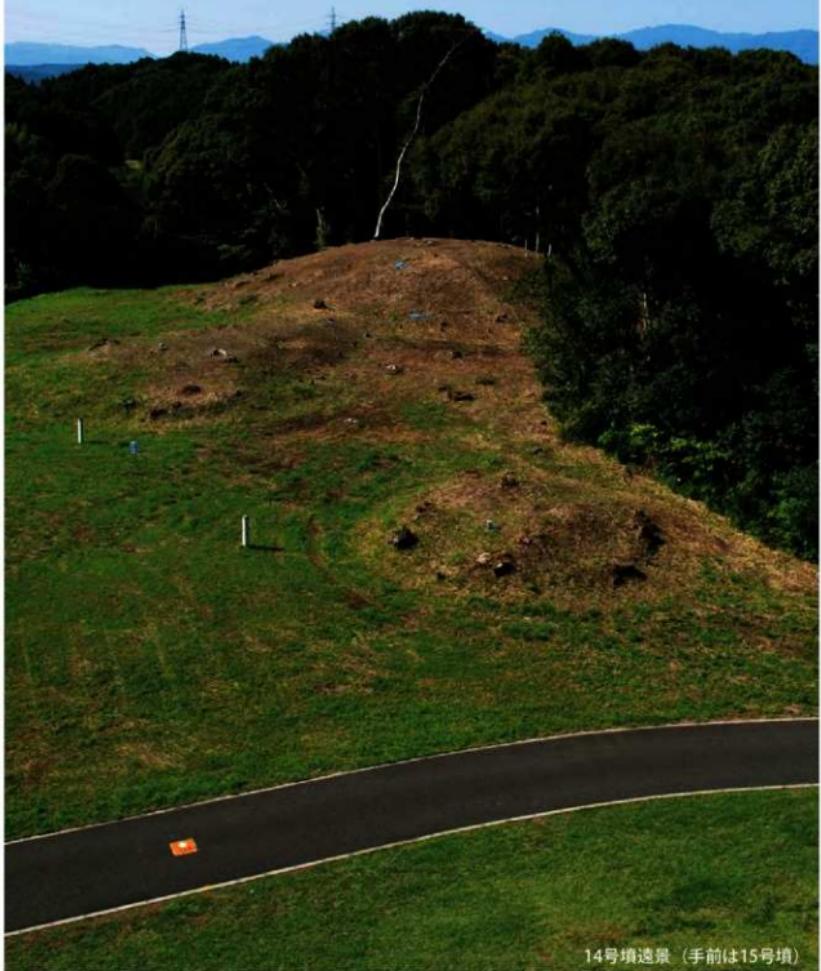
- 有馬義人 2006 「南九州における前期古墳編年の検討」「前期古墳の再検討」九州前方後円墳研究会。
- 沼澤 豊 2005 「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」「考古学雑誌』第89巻第2号、日本考古学会。
- 廣瀬 覚 2011 「1墳丘と外表施設の諸相⑥葺石と段築成」「墳墓構造と葬送祭祀」古墳時代の考古学3、同成社。
- 柳沢一男 1997 「宮崎市内の古墳」「宮崎県前方後円墳集成」宮崎県史叢書、宮崎県。
- 柳沢一男 2011 「南九州の出現期古墳」「邪馬台国時代の南九州と近畿」香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」。
- 宮崎市教育委員会 2010 「生目古墳群1」-生目5号墳発掘調査報告書-、宮崎市文化財調査報告書第80集。

集成編年	丘陵北半	丘陵南半
1		
2	1号墳	
3	3号墳	21号墳 (前編)
4		22号墳 (前編) 14号墳 (前編)
5	5号墳 (前編)	
6		
7		● 17号墳
8	7号墳	
9		
10		16号墳 ● ● 19号墳

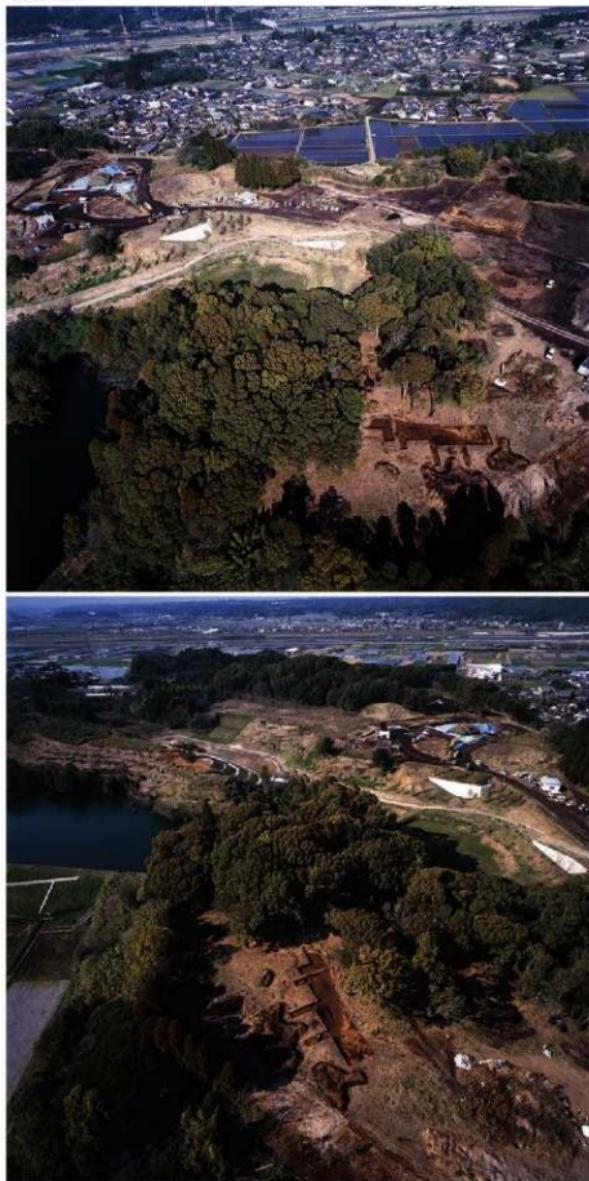
■は時間比定の根拠が弱いもの

第32図 生目古墳群主要古墳変遷図

## 写真図版



14号墳遠景（手前は15号墳）





上左：14a 墳頂部（南から）  
上右：14a テラス（西から）  
中：14a 全景（北西から）  
下左：14a 蓋石棟出状況（北から）  
下右：14b 全景（南東から）



上左：14c 葦石検出状況（北東から）

上右：14c 全景（北西から）

下：14d 葦石検出状況垂直写真





一段目左：14d 墳頂部（南から）  
一段目右：14d 墓輪出土状況（南西から）  
二段目左：14d 墓輪①～③出土状況  
（南西から）  
二段目右：14d 墓輪②出土状況（西から）  
三段目：14d 墓輪⑥出土状況（南東から）  
四段目：14d 墓輪⑧出土状況（北から）



- 一段目：14 e 葦石検出状況（東から）  
二段目：14 e 葦石検出状況（南東から）  
三段目左：14 e 22号地下式横穴墓  
検出状況（北西から）  
三段目右：14 e 22号地下式横穴墓  
検出状況（北西から）  
四段目左：14 e 22号地下式横穴墓  
堅坑半裁状況（南西から）  
四段目右：14 e 22号地下式横穴墓  
堅坑半裁状況（西から）



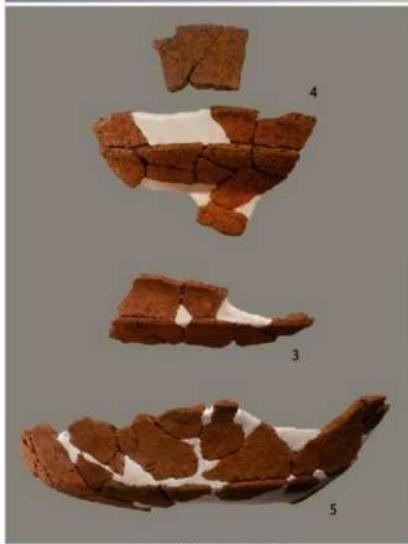


上左：14g 落ち込み検出状況（北西から）  
上右：14g 落ち込み調査状況（北西から）  
中左：14g 全景（南から）  
中右：14i 全景（北西から）  
下：14h くびれ部検出状況（南西から）



2

壺形埴輪二重口縁①

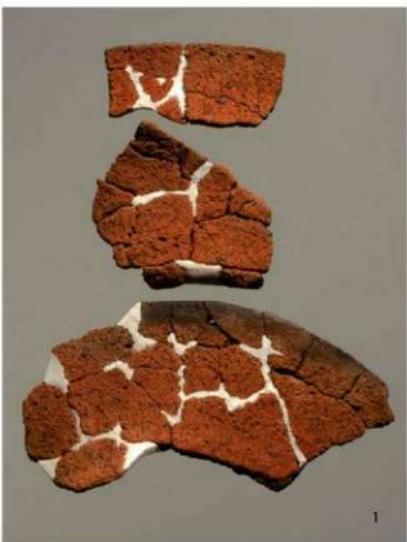


4

3

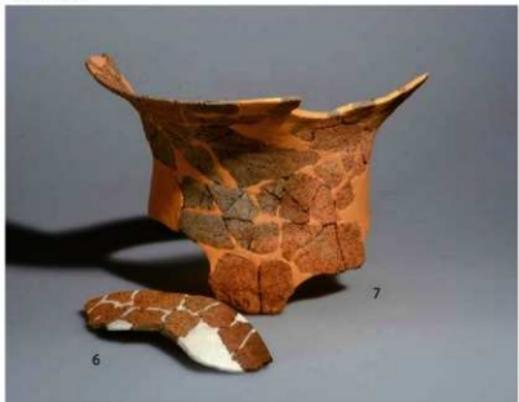
5

壺形埴輪二重口縁②



1

壺形埴輪二重口縁③



壺形埴輪單口縫

壺形埴輪胴～底部  
(底部孔断面L字状)



壺形埴輪底部①  
(底部孔断面L字状)





壺形埴輪底部②（底部孔断面三角形状）



壺形埴輪底部③（底部孔指頭押圧成形）



土師器壺口縁部

17



## 報告書抄録

ふりがな	いきめこふんぐんよん							
書名	生目古墳群IV							
副書名	生目14号墳発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	石村友規(編集)、竹中克繁							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号							
発行年月日	2014年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
いきめこふん 生目14号墳	みやざきし おおあざわと だい 宮崎市大字跡江	市町村	遺跡番号	31°56'54" 付近	131°23'15" 付近	2001.9.10 ～2002.2.28 2002.12.13 ～2003.3.31 2003.12.1 ～2004.3.31 2005.12.1 ～2006.3.30 2006.4.5 ～2007.3.30	450m <sup>2</sup>	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
生目14号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘、古墳周溝、葺石、敷石	壺形埴輪・土師器・弥生土器		後円部、前方部共に2段築成。壺形埴輪出土。		
要約	生目14号墳	墳長63mの前方後円墳。後円部、前方部共に2段築成であり、墳丘斜面を葺石、テラス部分、墳頂平坦面を敷石で被覆していた。後円部平坦面、前方部平坦面から後円部へと接続するスロープ上で壺形埴輪の樹立を確認した。						

宮崎市文化財調査報告書 第98集

生目古墳群IV

生目14号墳  
発掘調査報告書

2014年3月

発行 宮崎市教育委員会